埼玉県戸田市遺跡調査会報告書 第4集

鍛冶谷（かじや）・新田口（しんでんぐち）遺跡Ⅵ

1994

戸田市遺跡調査会

はじめに

戸田市遺跡調査会会長　奥墨修一

戸田市は、東京の20km圏に位置し、通勤に便利な埼京線の開通によりマンションの建設が進み、一層ベッドタウンとして発展し、街の景観も大きく変わってまいりました。

本書は、このように大きく変貌する戸田市の都市開発の中で、貴重な遺跡を記録保存し、後世に永久に伝えていくために緊急に発掘された「鍛冶谷・新田口遺跡Ⅵ」の記録です。

鍛冶谷・新田口遺跡は、荒川の氾濫によって形成された自然堤防の上に残されてきた戸田を代表する遺跡の一つであり、この遺跡の調査も第6次を数え、今までに数々の貴重な遺構や遺物の発掘をしてまいりました。

このような貴重な発掘調査の積み重ねにより、戸田市の弥生時代後期から古墳時代前期の住居跡や方形周溝墓等多くの歴史的な成果を得ることができました。

本書を埋蔵文化財の保護と普及活動の資料として、また学術研究の基礎資料としてご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、本発掘調査に対し多大なご理解とご協力を賜りました、株式会社オリックス、そして、直接発掘現場でご協力をいただきました戸田市遺跡調査協力会の皆様に深く感謝を申し上げ、あいさつといたします。

例　　言

1　本書は、埼玉県戸田市本町３－1771－４他の寄宿舎建設工事に伴って発掘調査された鍛冶谷・新田口遺跡第６次調査の発掘調査報告書である。

2　発掘調査事業及び整理事業は、寄宿舎建設の事業者である㈱オリックス（東京都港区浜松町２－４－１）から、戸田市遺跡調査会が委託を受けて実施したものである。

3　発掘調査は、平成４年１月16日から２月26日にわたって行った。

4　発掘調査は別表に掲げた調査組織により実施した。

発掘担当者　　小　島　清　一　（戸田市教育委員会　社会教育課）

5　出土品の整理及び図版の作成は、発掘担当者の指導により、整理参加者全員で行った。

6　本書の作成にあたり、執筆、写真撮影、編集は小島が行い、渡辺豊子、尾形美枝子の協力を得た。

7　発掘調査から報告書を作成するまでの過程で、下記の方々から御教示、御協力を賜った。記して謝意を表します。（敬称略）

伊藤和彦　大竹　仁　鏑木　洋　高橋　学　野沢　均　福田　聖

戸田市立戸田中学校　戸田市立郷土博物館　戸田市遺跡調査協力会

8　発掘調査及び整理参加者は、下記のとおりである。

五十嵐　紀志子　上　原　　勇　榎　本　真由美　大　井　公　代　岡　崎　久　子

尾　形　美枝子　鬼　沢　博　子　嘉　規　小夜子　桑　原　裕　子　小　出　美代子

小　林　邦　子　早乙女　孝　子　渋　谷　秀　晴　関　　徳太郎　左　座　けい子

高　橋　冨士子　高　松　国　光　寺　内　　愛　根　本　　真　林　　佐江子

広　瀬　幸　子　渡　辺　豊　子

目　次

はじめに　　戸田市遺跡調査会会長　奥墨修一

例　言

凡　例

1　発掘調査に至までの経過 …… 1

2　発掘調査の経過 …… 2

3　鍛冶谷・新田口遺跡の立地と環境 …… 3

4　鍛冶谷・新田口遺跡の概観 …… 5

5　遺構と出土遺物 …… 15

（1）　方形周溝墓と出土遺物 …… 15

（2）　土壙と出土遺物 …… 20

（3）　溝と出土遺物 …… 23

（4）　井戸と出土遺物 …… 28

（5）　堀と出土遺物 …… 28

（6）　その他の遺構と出土遺物 …… 30

（7）　グリッド出土の遺物 …… 32

6　まとめ …… 33

挿 図 目 次

第１図　鍛冶谷・新田口遺跡Ⅵ及びその周辺の遺跡位置図 …… 3
第２図　鍛冶谷・新田口遺跡調査地位置図 …… 5
第３図　基本土層図 …… 6
第４図　鍛冶谷・新田口遺跡Ⅵ遺構配置図 …… 6
第５図　遺構断面配置図 …… 7
第６図　遺構断面図（A～D） …… 9
第７図　遺構断面図（E～H） …… 10
第８図　遺構断面図（I～L） …… 11
第９図　遺構断面図（M～O） …… 12
第10図　第１号方形周溝墓実測図 …… 13
第11図　第１号方形周溝墓出土遺物 …… 16
第12図　第１・２・３・４号土壙実測図 …… 21
第13図　第４号土壙出土遺物 …… 22
第14図　第１号溝実測図 …… 23
第15図　第１号溝出土遺物 …… 23
第16図　第２・３・４号溝実測図 …… 25
第17図　第５号溝実測図 …… 26
第18図　第３・４・５号溝出土遺物 …… 27
第19図　第１号井戸実測図 …… 28
第20図　第１号堀実測図 …… 28
第21図　第１号堀出土遺物 …… 29
第22図　ピット実測図 …… 31
第23図　グリッド出土の遺物 …… 32

表　目　次

第1表　第1号方形周溝墓出土遺物（1）…… 17
第2表　第1号方形周溝墓出土遺物（2）…… 18
第3表　第1号方形周溝墓出土遺物（3）…… 19
第4表　第4号土壙出土遺物 …… 22
第5表　第1号溝出土遺物 …… 23
第6表　第3・4・5号溝出土遺物 …… 27
第7表　第1号堀出土遺物（1）…… 29
第8表　第1号堀出土遺物（2）…… 30
第9表　ピット一覧表 …… 31
第10表　グリッド出土の遺物 …… 32

図　版　目　次

図版1　鍛冶谷・新田口遺跡Ⅵの位置(1)
調査区域全景及び第1号方形周溝墓(2)
図版2　第1号方形周溝墓西溝（南から）(1)
〃　南溝（西から）(2)
〃　東溝（北から）(3)
図版3　第1号方形周溝墓北溝（西から）(1)
第1号方形周溝墓東溝と第1号堀の切り合い状態(2)
第1号方形周溝墓西溝土器出土状態(3)
第1号方形周溝墓東溝(4)
第1号土壙（北から）(5)
図版4　第2号土壙(1)
第3号土壙(2)
第4号土壙(3)
第4号土壙遺物出土状態(4)
第1号溝（南から）(5)
第2・3・4号溝（東から）(6)
図版5　第5号溝（南から）(1)
第1号堀(2)
図版6　ピット1(1)・ピット2(2)・ピット3(3)
ピット4(4)・ピット5(5)・ピット6(6)
ピット7(7)
第1号井戸(8)
図版7　第1号方形周溝墓出土遺物(1)～(5)
底部穿孔(2)
第4号土壙出土遺物(6)
図版8　第1号溝出土遺物(1)
第3号溝出土遺物(2)
第4号溝出土遺物(3)
第5号溝出土遺物(4)
第1号堀出土遺物(5)
グリッド出土の遺物(6)

発掘調査の組織

会長	戸田市教育委員会教育長	奥墨修一
理事（会長代理）	戸田市教育委員会教育次長	栗栖初秀
理事	戸田市文化財保護委員会委員	金子弘
〃	〃	萩原勝明
〃	戸田市開発部都市計画課課長	家崎匡
〃	戸田市開発部市街地開発課課長	熊谷清志
〃	戸田市建設部建築課課長	杉浦剛男
〃	戸田市教育委員会社会教育課課長	石井勝則
監事	戸田市社会教育委員会委員長	芝崎薫
〃	戸田市郷土博物館館長	松井清
事務局長	戸田市教育委員会社会教育課課長	石井勝則
事務局員	戸田市教育委員会社会教育課課長補佐	前島功佑
〃	〃 社会教育課専門員	和田卓
〃	〃 社会教育課主席主任	佐藤勝巳
〃	〃 社会教育課主任	小島祐一
〃	〃 〃	宮崎敏志子
調査員	〃 社会教育課学芸員	小島清一

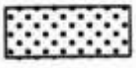
凡例

○ 本書に掲載した挿図の縮尺は、原則として遺構図1／80・1／40、遺物実測図1／4である。それ以外は、図に添えたスケールを参照されたい。

○ 遺構の断面図は、切り合う部分に設定したため、遺構の重複するところが多く、遺構の説明の前にまとめて掲載した。

○ 遺構、遺物図中の焼土、炭化物等の表示は次のとおりである。

焼土

炭化物

撹乱

土器の赤彩部分

○ 土器観察表における胎土の記号は、下記のとおりである。

A：石英、B：金雲母、C：斜長石、D：黒く光る石、E：赤色粒子、F：白色粒子、G：褐色粒子、H：砂粒子

○ 土層中の水糸レベルは、すべて標高3.40mである。

1　調査に至るまでの経過

平成３年12月４日、東京都港区浜松町２丁目４番１号の株式会社オリックス不動産事業部取締役橋本悦男氏（以下「事業者」という。）から、戸田市本町３丁目1771番４号他に寄宿舎建設の開発行為に伴う事前協議がなされた。

戸田市では、昭和60年の埼京線の開通により共同住宅等の開発が進み、文化財の保護が急務となっている。このような状況において、戸田市教育委員会では、開発担当所管課と各種の協議を重ね文化財保護と開発事業との調整を図っている。

鍛冶谷・新田口遺跡は、昭和42年に初めて調査が行われて以来、弥生時代後期から古墳時代にかけての集落跡が存在することが明らかになっている。

教育委員会では、当該地が鍛冶谷・新田口遺跡に隣接するため、埋蔵文化財が所在する可能性が高いものと判断し、事業者に試掘調査を実施する旨通知した。

試掘調査は、平成３年12月18日から19日の２日間にわたり実施した。結果、弥生時代後期の溝跡（方形周溝墓）等の遺構や遺物が検出された。そこで、当該地には埋蔵文化財が所在する旨事業者に通知し、その取り扱いについて教育委員会と事業者で協議が行われた。遺跡の保存については、既に開発許可がなされ計画を変更することが不可能であることから、事前に記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

これをもって事業者からは、平成４年１月６日付で、文化財保護法第57条の２第１項の規定による埋蔵文化財発掘届が文化庁長官あてに提出された。発掘調査に際し、教育委員会と事業者で協議を重ね、事業が緊急を要することを考慮し、戸田市遺跡調査会会長と事業者は平成４年１月10日に事業委託契約を締結、調査は平成４年１月16日から開始することとなった。

戸田市遺跡調査会からは、文化財保護法第57条第１項に基づく埋蔵文化財発掘調査届が文化庁長官あてに提出された。

なお、文化庁長官からは平成４年３月30日付、委保第５の76号をもって発掘届を受理した旨通知があった。

2　発掘調査の経過

鍛冶谷・新田口遺跡第６次発掘調査は、平成４年１月16日から２月26日まで実施した。約１ヶ月半の短い期間での調査となった。以下、調査日誌をもとに経過を整理してまとめておきたい。

◇１月16日から17日／表土の掘削

１月16日、早朝から重機により表土の掘削作業を開始する。調査区域や残土置き場等の設定については、試掘調査の記録をもとに慎重に行った。掘削の途中、遺物の包含層である第４層より弥生時代後期から古墳時代前期の土器や近世以降の陶磁器等が点々と検出され遺構の重複について濃密な状況を示していた。

◇１月20日から29日／遺構の確認

表土が除去され、東側から人力により遺構確認作業を始める。試掘調査の結果をもとに精査を丹念に行ったが、縦横に掘り込まれている溝や土壙等、遺構の重複が著しく、方形周溝墓の検出にやや困難な状況であった。この結果を、概念図として作成する。

◇１月21日／基準点測量及びグリッド設定

基準点観測と杭打ち作業を行い、調査区域内にグリッドを設定する。

◇１月30日から２月20日／遺構の調査

遺構の調査を開始する。まず、第１号溝から取り掛かる。次に土壙、最後に最も古くなる第１号方形周溝墓の調査を行った。調査にあたっては、遺構の重複状況から各遺構の新旧関係を明らかにするため、切り合い部分にセクションポイントを設定し、調査を進めた。方形周溝墓を除いては、全体的に遺物の量が少なかったため、調査が順調に進められた。

◇２月21日／全体写真の撮影

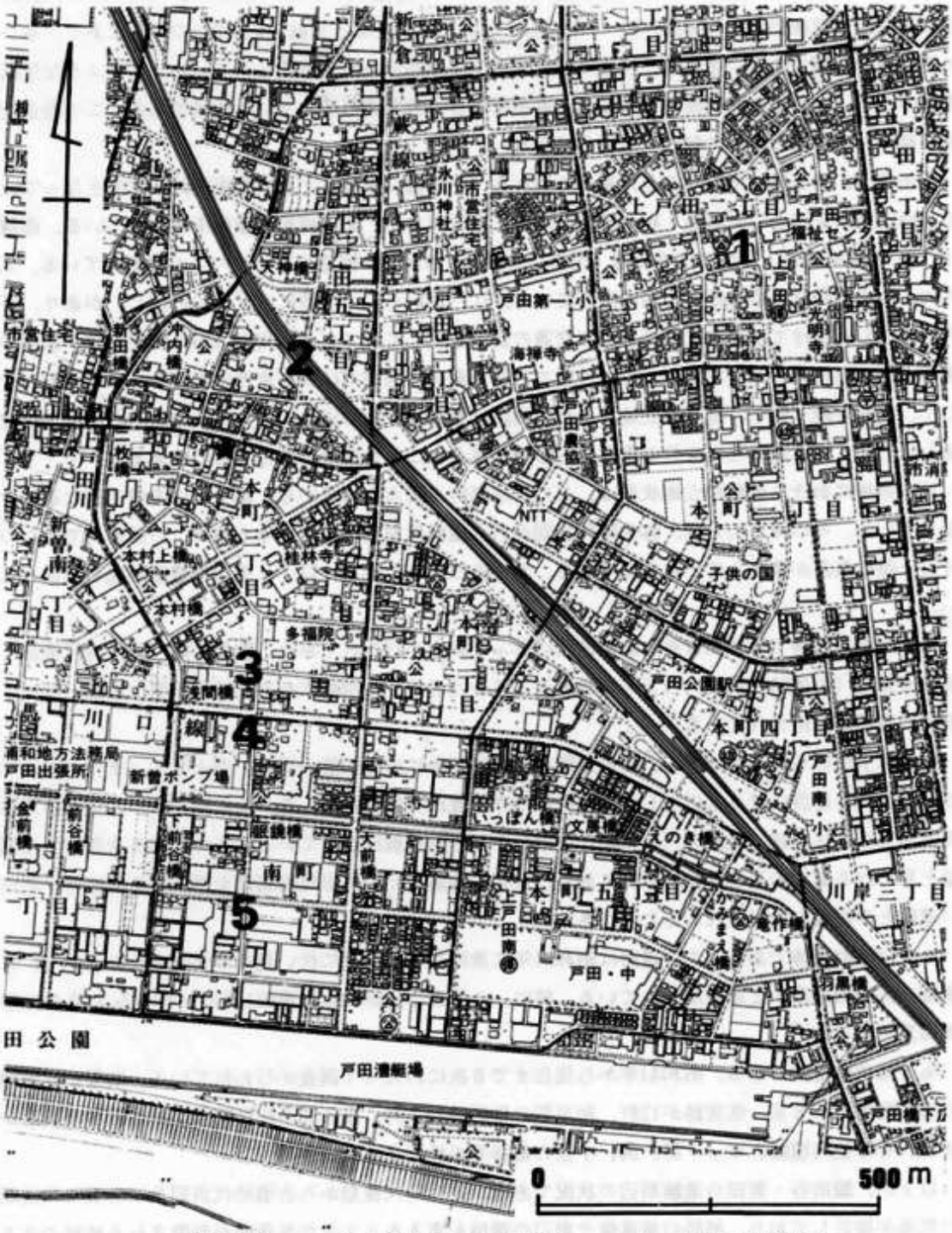
遺構の全容を明らかにするため、朝から参加者全員で調査区内の清掃を行い、全体写真の撮影を予定通り行った。

◇２月24日から２月26日／全体図の作成及び測量

検出された遺構の全体図作成及び測量を行う。２月26日に作業を終え、約１ヶ月半を過ごしたプレハブ内の資材を撤収し、現地におけるすべての作業を終了した。

調査日数　28日、参加延べ人数 230名であった。

3　鍛冶谷・新田口遺跡の立地と環境



1．前谷遺跡　　2．鍛冶谷・新田口遺跡　　3．上戸田本村遺跡

4．南町遺跡　　5．南原遺跡　　★　鍛冶谷・新田口遺跡Ⅵ

第1図　鍛冶谷・新田口遺跡Ⅵ及び周辺の遺跡位置図

鍛冶谷・新田口遺跡Ⅵ（第６次調査）の調査地は、戸田市本町３丁目1771番４号他に所在する。第１次から第５次調査の地点から見ると南側に位置し、「中央通り」を境に南側にあたる。この付近は、ＪＲ埼京線（昭和63年10月開業）の「戸田駅」「戸田公園駅」より直線で約600ｍの位置にあり、歩いて約10分の距離である。さらに、都心の新宿駅までは約25分を所要時間としている。このような生活環境の中で、中高層の共同住宅をはじめ、事務所などの再開発も進んでいる地域である。この調査地も同様で、寄宿舎の建設に起因するものである。

戸田市は、埼玉県の南端にあり、荒川に架かる「戸田橋」を渡ると東京都板橋区、北区となっている。西は荒川を境として朝霞・和光両市となり、東は川口市、北は浦和・蕨両市と接している。面積は、18.11㎡を測る。東側には中山道（国道17号）が、西側には国道17号バイパスが縦断している。さらに、中央部には埼京線が斜方向に進めている。江戸期から、中山道には「戸田の渡し」があり、江戸（東京）へ向けて、北の玄関口として交通の要衝を成して来ている。荒川（旧入間川）は、北側の浦和方面から市域の西辺を流れ、笹目付近で方向を変え、南部ではほぼ東西に流路をとっている。そして、氾濫を繰り返し、遺跡の立地する自然堤防（微高地）を形成している。この鍛冶谷・新田口遺跡をはじめ、南原遺跡など古代の集落にも影響を与えたことも想像でき得るものである。

戸田市域における遺跡の立地状況は、この自然堤防上に点在している。第１図はその主要な遺跡を表している。そのほとんどは、弥生時代後期から古墳時代前期にはじまるもので、戸田市内ではこの付近一帯に集落が集まっている地域である。本遺跡は№２である。以下、周辺の遺跡の説明を加えたい。

№１は前谷遺跡で、昭和47年に店舗建設に伴って調査が行われており、弥生町期（弥生時代後期）及び五領期（古墳時代前期）の方形周溝墓各１基をはじめ、古墳時代や平安時代の溝、土壙、ピット群等の遺構が検出されている。

№３は上戸田本村遺跡である。この遺跡は、昭和53年に市史編纂事業の一環として、また平成５年に共同住宅の建設に伴うものとして２次にわたり調査が実施されている。ここからは、五領期の方形周溝墓及び、住居跡、鬼高期（古墳時代後期）の住居跡が検出されている。また、第２次調査では環濠と思われる溝状の遺構も検出されており、周辺の集落とくに方形周溝墓群を形成する鍛冶谷・新田口遺跡との関係も検討されるところである。

№４は南町遺跡である。この遺跡は昭和61年に共同住宅の開発に伴い調査が実施されたもので、五領期の方形周溝墓が２基検出されている。特に、１基は１辺が14ｍで溝幅1.5ｍを有する大型の方形周溝墓である。

№５は南原遺跡である。昭和44年から現在まで６次にわたって調査が行われている。結果、五領期の方形周溝墓が８基、住居跡が12軒、和泉期の住居跡が３軒、鬼高期の住居跡が１軒、円形周溝墓が４基、その他円墳跡、ピット群、溝、中世の堀跡等が検出されている。

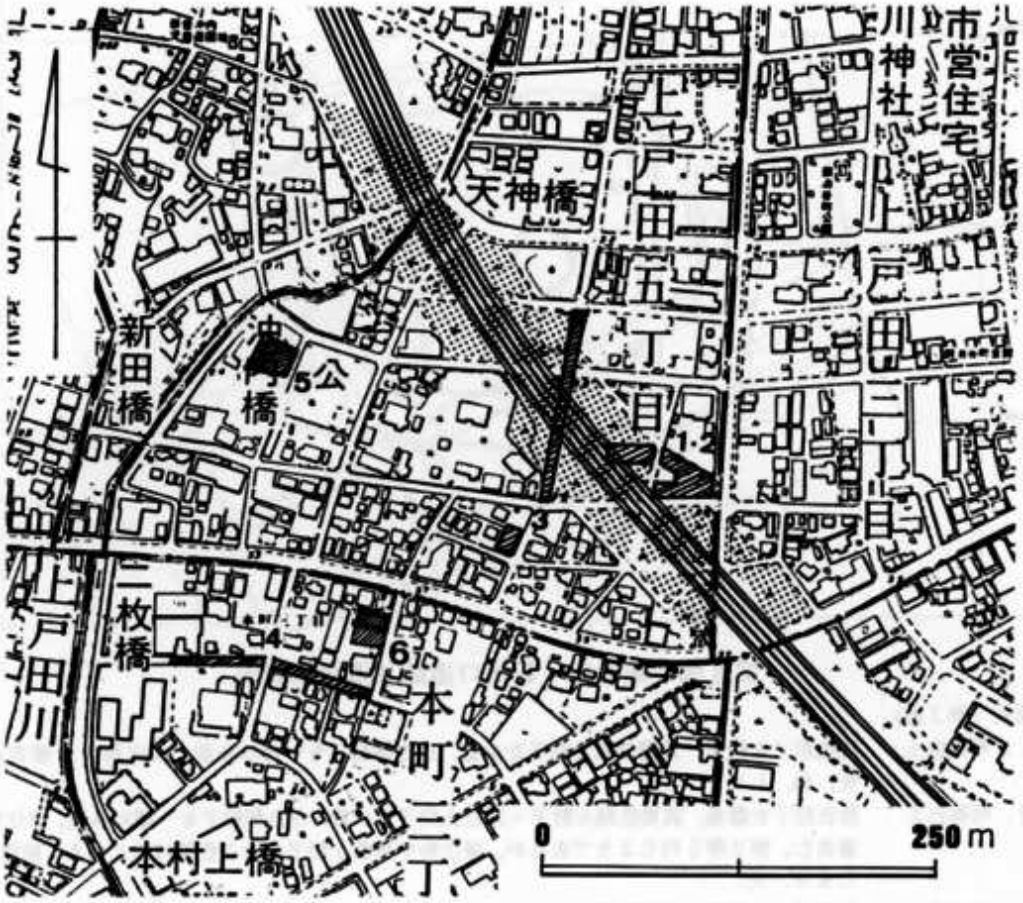
以上が、鍛冶谷・新田口遺跡周辺の状況である。弥生時代後期から古墳時代前期及び古墳時代後期の集落が接近しており、当時の集落像や周辺の環境を考えると大きな集落群が想像される地域である。

4　鍛冶谷・新田口遺跡の概観

鍛冶谷・新田口遺跡は、荒川（旧入間川）の溢流によって形成された、火山灰質の砂質粘土からなる自然堤防の北端縁に立地した集落跡である。基盤となる土層は黄褐色粘土層である。集落は、弥生時代後期から古墳時代前期の方形周溝墓群を中心とし、多数の方形周溝墓や住居跡などが折り重なるように構築されている。昭和51年に埼玉県選定重要遺跡となっている。

この地域は、早くから区画整理がなされ現在「上戸田」という地番となっているが、元は「鍛冶谷」「新田口」という名称であった。そのため、第１次調査については「鍛冶谷遺跡」と「新田口遺跡」として調査が行われている。その後、同一集落内であることが確認され、「鍛冶谷・新田口遺跡」と称している。

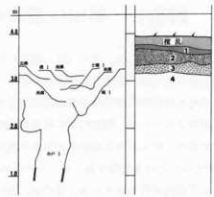
現在までの調査の経過については、第２図にもあるが昭和42年に第１次調査が行われ、今回の調査で第６次を数える。その間、昭和60年に東北・上越新幹線及び埼京線の敷設工事に伴って、（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団により約２万1,000㎡にも及ぶ調査が行われている。市街地化が進む本市にあっては大きな調査となっている。



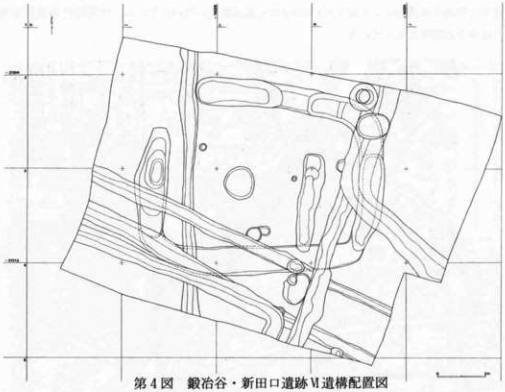
第２図　鍛冶谷・新田口遺跡調査地位置図

その結果、弥生時代後期から古墳時代前期の住居跡39軒、方形周溝墓104基を検出している。その他、同時期の溝や井戸も検出されており勾玉や管玉等の玉類、はしごや斧の柄等の木製品等々の遺物も検出されている。低地上に立地した方形周溝墓群として成果が得られている。

このような経過を経て成果はまとめられてきているが、今回の調査地点は明らかになっていなかった集落の南側部分にあたる。さらに南側の周辺部の確認調査の状況とを考え合わせるならば、集落の南限域を求める調査になったのではないかと理解している。



第３図　基本土層図



第４図　鍛冶谷・新田口遺跡Ⅵ遺構配置図

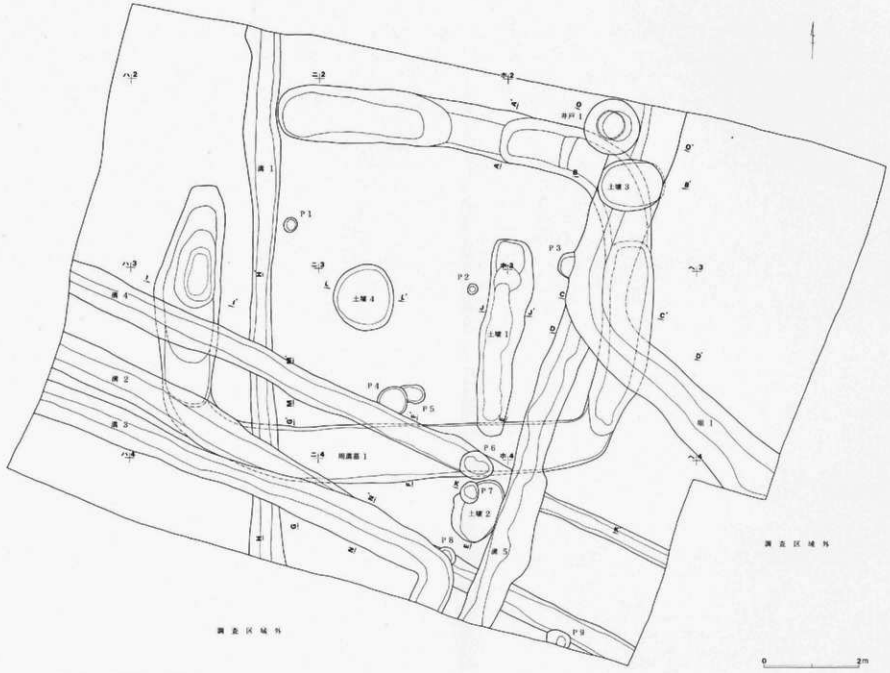
土層註（第３図）

1．明褐色土　橙色粒子を微量、黄褐色粘土粒子を少量、白色微粒子を一様に多量、炭化物を少量含む。粘性、弱。しまり、良。

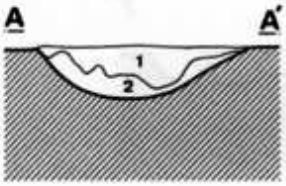
2．明褐色土　橙色粒子を微量、黄褐色粘土粒子・黒色土粒子を少量、白色微粒子を一様に多量、炭化物を少量含む。第２層と同じようであるが、炭化物や黒色土粒子を含み色調は暗くなる。粘性、弱。しまり、良。

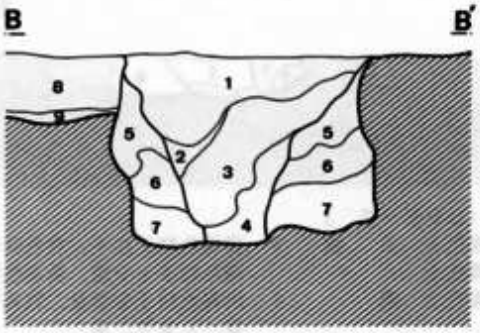
3．暗褐色土　橙色粒子を微量、黄褐色粘土粒子・ブロックを多量、白色微粒子を一様に多量含む。粘性、良。しまり、良。土器包含層。

4．黄褐色土　粘土質土層。含有物特になし。粘性、強。しまり、良。


井戸1
土壙3
P1
P2
P3
土壙4
土壙1
溝1
溝2
溝3
溝4
溝5
P4
P5
P6
P7
P8
P9
土壙2
現溝跡1
調査区域外
調査区域外
0
2m

第5図　遺構断面配置図



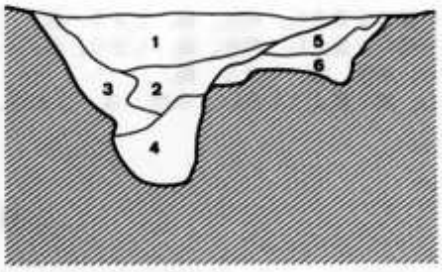


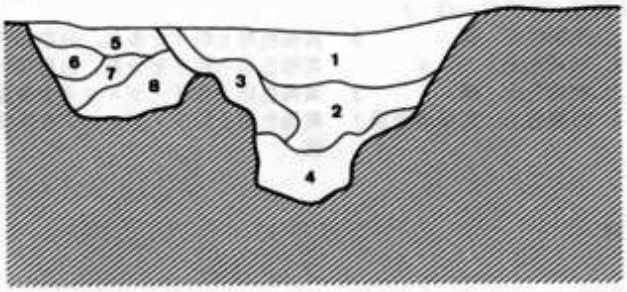
土層註（SPA－A′）

1. 暗褐色土　方形周溝墓 1　黄褐色粘土粒子を微量、白色粒子を一様に多量含む。粘性、良。しまり、良。
2. 暗褐色土　〃　橙色粒子を少量、黄褐色粘土粒子を多量、白色粒子を一様に多量含む。粘性、良。しまり、強。

土層註（SPB－B′）

1. 灰褐色土　堀　1　黄褐色粘土粒子を微量含む。粘性、弱。しまり、弱。
2. 灰褐色土　〃　黄褐色粘土粒子ブロックを多量含む。粘性、弱。しまり、良。
3. 灰褐色土　〃　黄褐色粘土粒子、炭化物を微量含む。粘性、弱。しまり、弱（ぼろぼろ）。
4. 暗褐色土　〃　黄褐色粘土粒子を少量含む、粘性、あり。しまり、良。
5. 明褐色土　土　壙　3　黄褐色粘土粒子を少量、赤色粒子を少量、白色粒子を多量含む。粘性、弱。しまり、弱（ぼろぼろ）。
6. 暗褐色土　〃　橙色粒子を少量、黄褐色粘土粒子を多量含む、粘性、弱。しまり、弱（ぼろぼろ）。
7. 黒褐色土　〃　橙色粒子を少量、黄褐色粘土粒子を多量、白色粒子を一様に多量含む。粘性、強。しまり、弱。
8. 暗褐色土　方形周溝墓 1　黄褐色粘土粒子を少量、白色粒子を一様に多量含む。粘性、良。しまり、良。
9. 暗褐色土　〃　黄褐色粘土粒子を少量、白色粒子を一様に多量、鉄斑をまばらに少量含む。粘性、良。しまり、良。





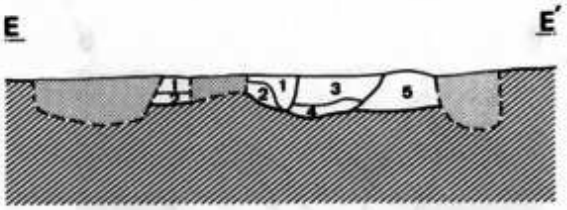
土層註（SPC－C′）

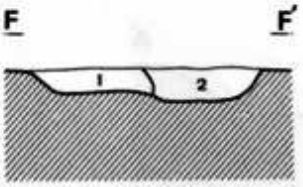
1. 灰褐色土　堀　1　黄褐色粘土粒子を微量含む。粘性、弱。しまり、弱。
2. 灰褐色土　〃　黄褐色粘土粒子、炭化物を微量含む。粘性、弱。しまり、弱（ぼろぼろ）。
3. 灰褐色土　〃　黄褐色粘土粒子・ブロックを多量含む。粘性、弱。しまり、良。
4. 暗褐色土　〃　黄褐色粘土粒子を少量含む。粘性、あり。しまり、良。
5. 暗褐色土　方形周溝墓 1　黄褐色粘土粒子を少量、白色粒子を一様に多量含む。粘性、良。しまり、良。
6. 暗褐色土　〃　黄褐色粘土粒子を少量、白色粒子を一様に多量、鉄斑をまばらに少量含む。粘性、良。しまり、良。

土層註（SPD－D′）

1. 灰褐色土　堀　1　黄褐色粘土粒子を微量含む。粘性、弱。しまり、弱。
2. 灰褐色土　〃　黄褐色粘土粒子、炭化物を微量含む。粘性、弱。しまり、弱（ぼろぼろ）。
3. 灰褐色土　〃　黄褐色粘土粒子・ブロックを多量含む。粘性、弱。しまり、良。
4. 暗褐色土　〃　黄褐色粘土粒子を少量含む。粘性、良。しまり、良。
5. 明褐色土　溝　5　黄褐色粘土粒子を多量、白色粒子を一様に微量含む。粘性、弱。しまり、良。
6. 明褐色土　〃　黒色土ブロックを少量、黄褐色粘土粒子を多量、白色粒子を一様に微量含む。粘性、弱。しまり、良。
7. 暗褐色土　〃　黄褐色粘土粒子を少量、黒色土ブロックを多量、白色粒子を一様に少量含む。粘性、良。しまり、良。
8. 黒褐色土　〃　黄褐色粘土粒子を少量、黄褐色粘土ブロックを多量含む。粘性、良。しまり、良。

第6図　遺構断面図（A～D）



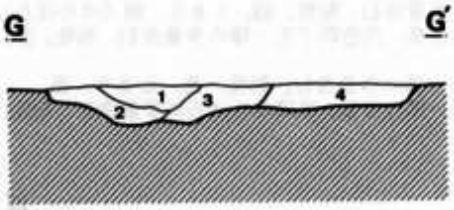


土層註（SPE－E′）

1. 暗褐色土　土　壙　2　黄褐色粘土粒子、白色粒子を少量含む。粘性、良。しまり、良。
2. 暗褐色土　〃　橙色粒子を少量、黄褐色粘土粒子を多量含む。粘性、良。しまり、良。
3. 暗褐色土　溝　4　灰褐色粒子を微量、黄褐色粘土粒子を少量、白色粒子を一様に多量含む。粘性、良。しまり、良。
4. 暗褐色土　〃　灰褐色粒子を微量、黄褐色粘土粒子を多量、白色粒子を一様に多量含む。粘性、良。しまり、良。
5. 明褐色土　方形周溝墓1　砂質。黄褐色粘土粒子を多量、白色粒子を一様に多量、鉄斑を多量含む。粘性、良。しまり、弱。

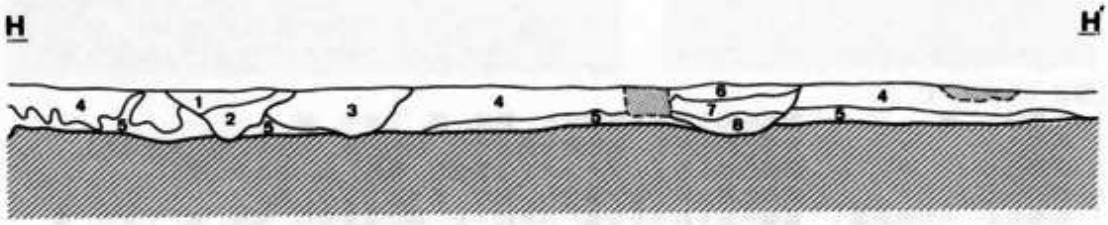
土層註（SPF－F′）

1. 黒褐色土　溝　4　黄褐色粘土粒子を多量、白色粒子を一様に少量含む。粘性、弱。しまり、強。
2. 暗褐色土　方形周溝墓1　橙色粒子を少量、黄褐色粘土粒子を少量、白色粒子を一様に少量含む。粘性、弱。しまり、強。



土層註（SPG－G′）

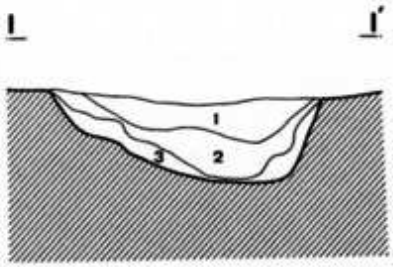
1. 黒褐色土　溝　3　黄褐色粘土粒子を多量、白色粒子を一様に少量含む。粘性、弱。しまり、強。
2. 明褐色土　〃　黄褐色粘土粒子を少量、白色粒子を一様に少量含む。粘性、弱。しまり、弱。
3. 暗褐色土　溝　2　黄褐色粘土粒子・ブロックを多量含む。粘性、弱。しまり、弱。
4. 暗褐色土　方形周溝墓1　黄褐色粘土粒子・ブロックを少量含む。第5層よりも多い。粘性、良。しまり、強。

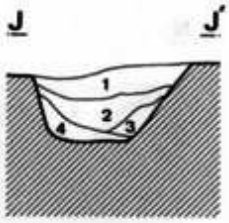


土層註（SPH－H′）

1. 明褐色土　溝　3　橙色粒子を微量、黄褐色粘土粒子を少量、白色粒子を一様に微量含む。粘性、良。しまり、良。
2. 暗褐色土　〃　黄褐色粘土粒子を多量含む。粘性、良。しまり、良。
3. 暗褐色土　溝　2　黄褐色粘土粒子をまばらに多量含む。粘性、良。しまり、良。
4. 暗褐色土　溝　1　橙色粒子を微量、黄褐色粘土粒子を微量含む。粘性、良。しまり、良。
5. 暗褐色土　〃　黄褐色粘土粒子を多量含む。粘性、強。しまり、良。
6. 暗褐色土　溝　4　橙色粒子を微量、黄褐色粘土粒子を微量含む。粘性、良。しまり、良。
7. 暗褐色土　〃　黄褐色粘土粒子を少量含む。粘性、良。しまり、良。
8. 黒褐色土　〃　黄褐色粘土粒子を少量含む。粘性、強。しまり、良。

第7図　遺構断面図（E～H）



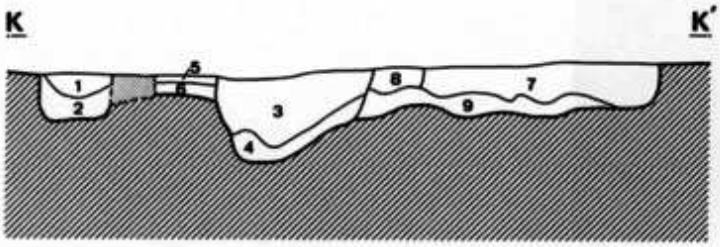


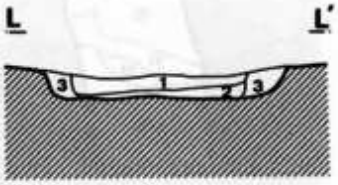
土層註（ＳＰＩ－Ｉ′）

1. 暗褐色土　方形周溝墓１　黄褐色粘土粒子を少量、白色粒子を一様に少量含む。粘性、良。しまり、良。
2. 暗褐色土　〃　黄褐色粘土粒子を少量、白色粒子を一様に少量、鉄斑をまばらに少量含む。第１層よりも色調は暗い。粘性、良。しまり、良。
3. 黒褐色土　〃　橙色粒子を少量、黄褐色粘土粒子を多量、鉄斑をまばらに少量含む。粘性、良。しまり、良。

土層註（ＳＰＪ－Ｊ′）

1. 明褐色土　土　壙　１　橙色粒子を微量、黄褐色粘土粒子を少量、白色微粒子を一様に多量含む。粘性、弱。しまり、良。
2. 黒褐色土　〃　黄褐色粘土粒子を少量、白色粒子を一様に少量。粘性、弱。しまり、良。
3. 黒褐色土　〃　黄褐色粘土粒子・ブロックを多量、白色粒子を一様に少量。粘性、弱。しまり、良。
4. 黒褐色土　〃　黄褐色粘土粒子を多量、白色粒子を一様に少量。粘性、弱。しまり、強。





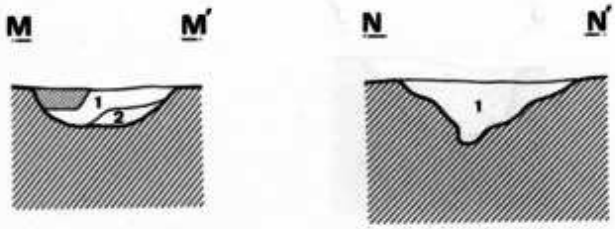
土層註（ＳＰＫ－Ｋ′）

1. 黒褐色土　ピット　７　黄褐色粘土粒子、白色粒子を一様に多量含む。粘性、良。しまり、良。
2. 黒褐色土　〃　黄褐色粘土粒子を少量、白色粒子を一様に多量含む。粘性、良。しまり、良。
3. 暗褐色土　溝　５　黄褐色粘土粒子を少量、黒色土ブロックを多量、白色粒子を一様に少量含む。粘性、良。しまり、良。
4. 黒褐色土　〃　黄褐色粘土粒子を少量、黄褐色粘土ブロックを多量含む。粘性、良。しまり、良。
5. 暗褐色土　土　壙　２　黄褐色粘土粒子、白色粒子を少量含む。粘性、良。しまり、良。
6. 暗褐色土　〃　橙色粒子を少量、黄褐色粘土粒子を多量含む。粘性、良。しまり、良。
7. 灰褐色土　溝　４　橙色粒子を微量、黄褐色粘土粒子を少量、粘性、弱。しまり、良。
8. 暗褐色土　〃　灰褐色粒子を微量、黄褐色粘土粒子を少量、白色粒子を一様に多量含む。粘性、良。しまり、良。
9. 暗褐色土　〃　灰褐色粒子を微量、黄褐色粘土粒子を多量、白色粒子を一様に多量含む。粘性、良。しまり、良。

土層註（ＳＰＬ－Ｌ′）

1. 灰褐色土　土　壙　４　橙色粒子を微量、黄褐色粘土ブロックを少量含む。粘性、弱。しまり、弱。
2. 明褐色土　〃　橙色粒子を少量、黄褐色粘土粒子を少量含む。粘性、良。しまり、良。
3. 黒褐色土　〃　黄褐色粘土ブロックを多量に含み、壁面の内側に貼り付けている。粘性、良。しまり、強。

第８図　遺構断面図（Ｉ～Ｌ）



土層註（SPM−M′）

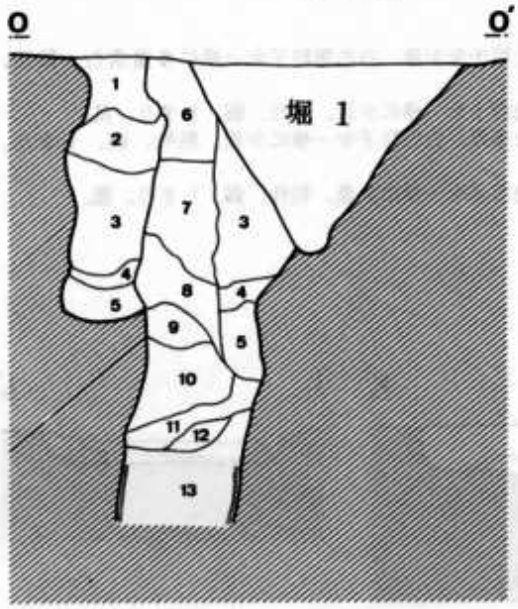
1. 黒褐色土　溝
2. 黒褐色土　〃

土層註（SPN−N′）

1. 暗褐色土　溝

4　橙色粒子を微量、黄褐色粘土粒子を多量含む。粘性、良。しまり、強。
橙色粒子を微量、黄褐色粘土粒子・ブロックを多量含む。粘性、良。しまり、強。

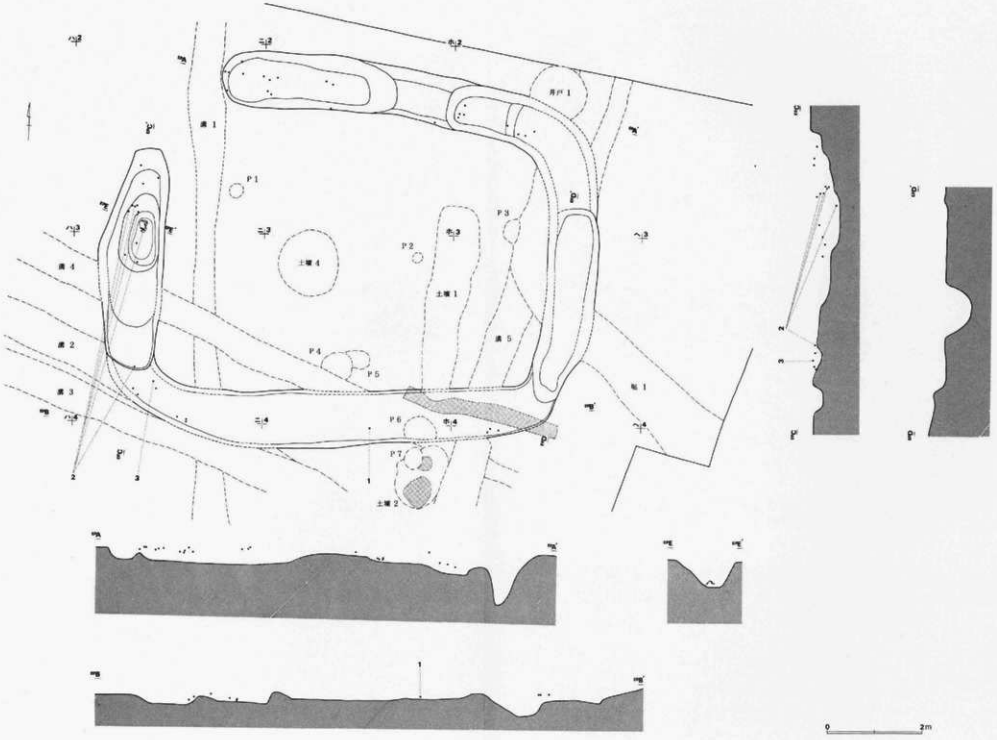
3　橙色粒子を極微量、黄褐色粘土粒子・白色微粒子を一様に少量含む。粘性、弱。しまり、強。



土層註（SPO−O′）

1. 明褐色土　井戸 1　黄褐色粘土粒子を多量、黒色土粒子を多量含む。粘性、弱。しまり、弱。
2. 明灰褐色土　〃　黄褐色粘土粒子を微量、白色微粒子を一様に多量、鉄斑を少量含む。粘性、弱。しまり、強。
3. 暗褐色土　〃　黄褐色粘土粒子・ブロックを多量、鉄斑を少量含む。粘性、弱。しまり、強。
4. 暗褐色土　〃　黄褐色粘土ブロックが全体を占める。粘性、良。しまり、強。
5. 暗褐色土　〃　黄褐色粘土粒子・ブロックを多量、鉄斑を少量含む。粘性、弱。しまり、強。
6. 明褐色土　〃　橙色粒子・黄褐色粘土粒子を少量、白色微粒子を一様に多量含む。粘性、弱。しまり、弱。
7. 明褐色土　〃　橙色粒子を少量、黄褐色粘土粒子・ブロックを多量、白色微粒子を一様に少量含む。粘性、弱。しまり、弱。
8. 明褐色土　〃　橙色粒子を多量、黄褐色粘土粒子を少量含む。粘性、良。しまり、弱（ぼろぼろ）。
9. 暗褐色土　〃　灰褐色粒子を少量、黒色土粒子を少量含む。黄褐色粘土粒子を多量、粘性、良。しまり、良。
10. 暗褐色土　〃　灰褐色土粒子を少量、黒色土粒子を少量含む。黄褐色粘土粒子を多量、粘性、良。しまり、強。
11. 黄褐色粘土ブロック〃
12. 暗褐色土　〃　灰褐色土粒子を少量、黒色土粒子を少量含む。黄褐色粘土粒子を多量、粘性、良。しまり、良。
13. 暗褐色土　〃　鉄斑を少量含む、浮き上がる。粘性、良。しまり、弱（さらさら）。

第9図　遺構断面図（M〜O）



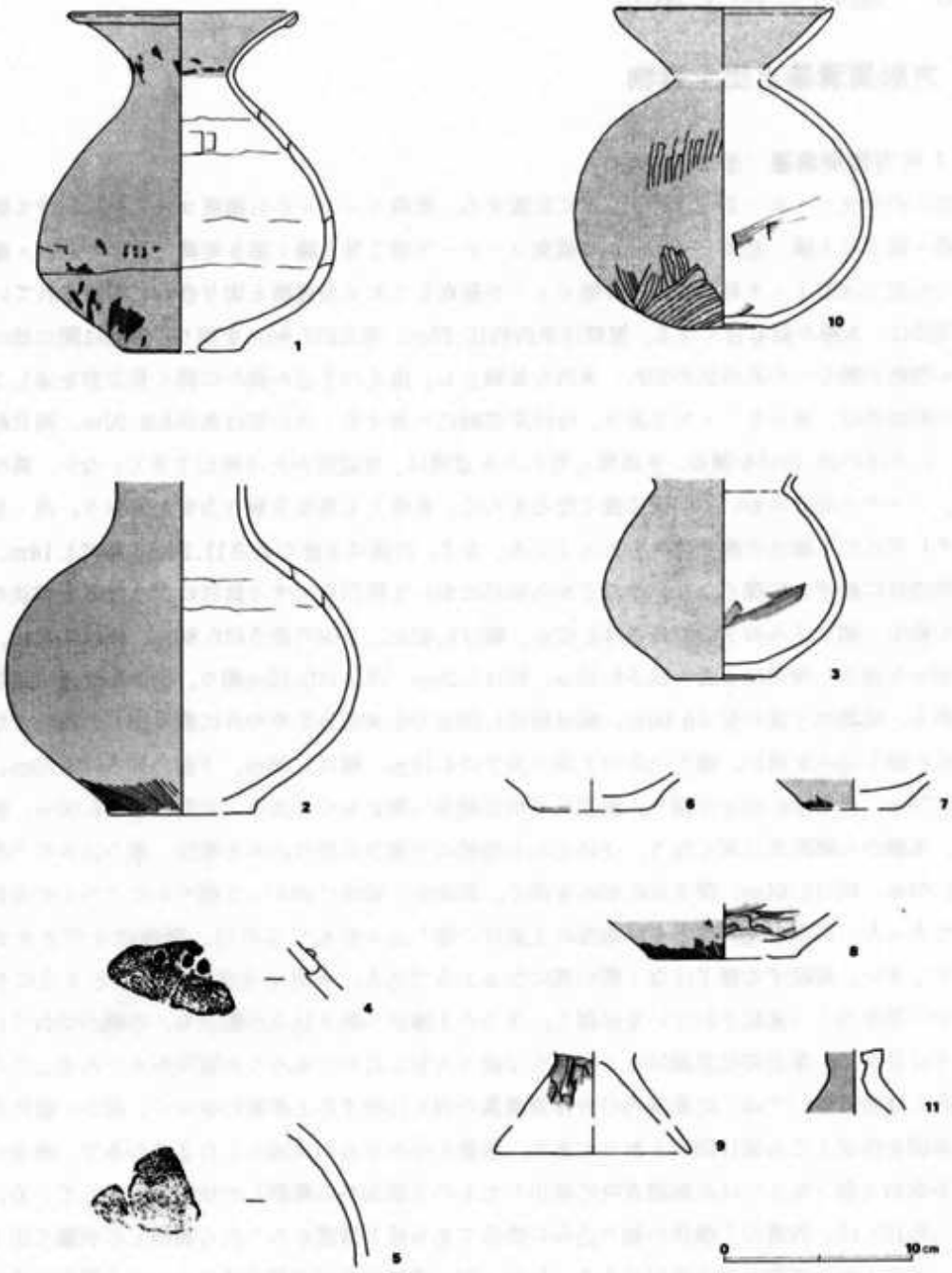
第10図　第1号方形周溝墓実測図

5　遺構と出土遺物

(1)　方形周溝墓と出土遺物

第１号方形周溝墓（第10・11図）

調査区の中央ハ～ホ－２～３グリッドに位置する。南西コーナーから南東コーナーにかけて第１～５号溝・第２号土壙、北東コーナーから南東コーナーで第３号土壙・第５号溝・第１号井戸・第１号堀、方台部では第１・４号土壙、その他ピットが散在しており各遺構と切り合って構築されている。新旧関係は、本跡が最も古くなる。規模は東西約10.50m、南北約2.80mを測り、形態は開口部にあたるのか判断が難しいが北西部が切れ、東西を長軸とし、南北の２辺が僅かに開く長方形を呈している。長軸の軸偏差は、W－５°－Nであり、ほぼ座標軸に一致する。方台部は東西約8.00m、南北約5.80mで、広さは約46.40㎡を測る。主体部と思われる遺構は、確認面からは検出できていない。溝については、コーナー部分において同様に浅くなるものの、各溝とも異なる掘り方をしており、西・東・北溝はそれぞれに土壙状の掘り込みをもっている。まず、西溝は上面の長さ11.24m、幅は1.14m。南側から階段状に緩やかに深くなり、中ほどから端部において楕円形ですり鉢状に深くなる土壙状の掘り込みを検出。掘り込みの上面の長さは4.62m、幅は1.40m、下面の長さは0.86m、幅は0.40m、深さは0.58mを測る。南溝は上面の長さ8.40m、幅は1.20m、深さは0.15m測り、全体がほぼ平坦な浅い溝である。東溝は上面の長さ6.00m、幅は推定1.06mで中央部分がやや外に張り出し一段低くなった土壙状の掘り込みを検出。掘り込みの上面の長さは4.10m、幅は1.06m、下面の長さは3.70m、幅は推定0.70m、深さは0.40mを測り、底面が平坦な細長い溝状ものである。北溝は長さ7.00m、幅は1.10m。東側から階段状に深くなり、中ほどから端部に土壙状の掘り込みを検出。掘り込みの下面の長さは1.94m、幅は0.64m、深さは0.49mを測る。底面から壁面に向かって緩やかに立ち上がる皿状のものであった。西溝と北溝はともに端部に土壙状の掘り込みをもつものの、壁面はそのまま立ち上がってしまい、接続する様子はなく開口部になるようである。各溝を全体的に見ると３点においてコーナー部をつくり連結されているが弱く、３つの土壙状の掘り込みが際立ち、四隅が切れているかのように見える。築造時に意識的にこのような掘り方をしたのであろうか疑問がもたれるところである。出土遺物については、同集落内の方形周溝墓の例と比較すると非常に少なく、細かい破片を含めて分布図を作成しても第10図のとおりである。形態が分かるものは図示した２点のみで、複合口縁を呈する壺形土器（№１）は試掘調査時に検出したもので底面から横倒しの状態で出土している。坩形土器（№10）は、西溝の土壙状の掘り込みの底面である最下層部からこれも横倒しの状態で出土している。このような遺物の出土状況である。なお、出土遺物周辺や遺構全体において土層中に炭化物や焼土は検出されていない。



第11図　第１号方形周溝墓出土遺物

第１表　第１号方形周溝墓出土遺物(1)　（第11図）

番号	器　種	大きさ（cm）	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
1	壺	口径（12.3） 胴径　16.0 底径　6.3 器高　18.4	胴部最大径がやや下位にあり、弱い稜をもつ。中位から頸部にかけて微妙に張り、肩部となる。頸部は緩やかにカーブし、口縁部に向けて漏斗状に直線的に開く。口縁部は幅の狭い複合口縁を呈する。複合部は、剝離部分から細い粘土紐の張り付けとわかる底部は、径2.5cmの大きさで焼成後、外面から穿孔される。外面は底部から胴部中位にかけて縦方向の、胴部中位から頸部にかけて横方向の、頸部から口縁部にかけて縦方向の刷毛整形痕。整形後、丁寧なヘラ磨き調整痕が残る。内面は頸部から口縁部に刷毛整形痕があり、胴部上半にはヘラ状工具による調整痕が残る。表面が摩滅し不明瞭であるが、外面及び内面口縁部に赤彩痕あり。また、胴部下半に５×８cm大の黒斑が認められる。残存80%。頸部以下は完存。	胎土　A微、FGH多 焼成　普通 色調　淡橙褐色	試掘時出土
2	壺	胴径　(18.8) 底径　(8.0)	平底の底部から胴部中位に向かって大きく張る。最大径は中位にもつ。肩部の張りは弱く、緩やかにカーブし頸部へ立ち上がる。口縁部を欠損。外面、底部付近に刷毛目を残す。内面はナデ、肩部に２段の輪積み痕が認められる。表面の摩滅が著しく不明瞭であるが、外面に赤彩痕あり。胴部60%、底部10%残。	胎土　FGH多 焼成　やや不良 色調　淡橙褐色	
3	小型壺	胴径　(7.2) 底径　5.3	平底の底部から胴部下半にかけて膨らみ、最大径となる。肩部の張りは弱い。口縁部を欠損する。外面は刷毛整形後ヘラ磨き。内面は丁寧な刷毛整形後ナデ調整外面には微妙に赤彩痕があり。胴部40%残。底部は完存。	胎土　F少、GH多 焼成　やや不良 色調　淡橙褐色	

第２表　第１号方形周溝墓出土遺物(2)

番号	器　種	大きさ（cm）	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
4	壺		壺の肩部破片。施文部の上部に約５mmの円形浮文を約１cm間隔で付す。外面は、刷毛整形後ナデ調整。さらに縄文を施す、地文は、不明瞭であるが、円形浮文の下部にＳ字状結節文が見られる。内面は、刷毛整形後ナデ調整を施す。調整は雑で輪積みを明瞭に残す。肩部５％残。	胎土　Ｃ微、ＦＧＨ多 焼成　普通 色調　淡褐色	
5	壺		壺の胴部破片。胴部中位から緩やかに肩部に向かう、球形の胴部。外面は横方向のヘラ磨き、肩部にLRの縄文を、縄文の下端にはＳ字状結節文が施される。内面は丁寧な木口状工具による調整痕を残す。外面に赤彩痕あり。	胎土　Ｇ少、ＦＨ多 焼成　良好 色調　淡灰褐色	
6	壺	底径　(6.0)	平底の底部。外面は刷毛整形後、丁寧なナデ調整。内面はナデ調整。底部５％残。	胎土　Ｇ微、Ｈ少Ｆ多 焼成　良好 色調　淡褐色	
7	壺	底径　(4.8)	平底の底部。外面は刷毛整形後、ナデ調整。内面は剥落が著しく明瞭ではないが、刷毛整形痕が残る。外面を赤彩する。底部10％残。	胎土　Ｅ少、ＦＧＨ多 焼成　普通 色調　淡橙褐色	
8	壺	底径　(8.2)	平底の底部。底部から胴部に向けて大きく開く。外面は刷毛形成後ナデ調整。内面は幅の狭い工具による丁寧な刷毛整形。外面を赤彩する。底部20％残。	胎土　ＣＧ微、ＦＨ多 焼成　良好 色調　淡灰褐色	
9	台付甕		直線的に開く脚台部。外面は縦方向の刷毛整形後ナデ調整。内面はナデ調整。脚台部20％残。	胎土　ＦＨ少 焼成　普通 色調　淡橙褐色	

第３表　第１号方形周溝墓出土遺物(3)

番号	器　種	大きさ（cm）	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
１０	坩	口径　(11.8) 胴部　15.8 底部　4.6 器高　(17.4)	胴部最大径を中位やや下にもち、球形を呈する。肩部は張りがなく、頸部で「く」の字状に屈曲する。口縁部は直線的に立ち上がり、端部に向かって微妙に内湾ぎみになる。口唇部は劣る。底部は削り出しており、上げ底状となる。外面は底部から中位にかけて斜方向の、中位から頸部にかけて縦方向の、口縁部では細かく縦方向のヘラ磨きが施される。内面は胴部では丁寧なナデ調整を施し、中位には木口状工具によるナデ調整痕が残る。口縁部では縦方向のヘラ磨きが施される。表面が摩滅し不明瞭であるが、外面及び内面の口縁部に赤彩痕あり。残存70%。口縁部は30%、底部は完存。	胎土　AE微、FG少 H多 焼成　普通 色調　淡褐色	
１１	器　台	接合部径 (2.7)	緩やかに外反するように開く脚部、及び接合部。貫通孔をもつ。受部との粘土の接合部分で分離する。内外面ともにナデ調整。さらに外面を赤彩する。脚部20%残。	胎土　A少、FH多 焼成　普通 色調　淡橙褐色	

(2) 土壙と出土遺物

第１号土壙（第12図）

調査区のニ～ホ－２～３グリッドに位置する。第１号方形周溝墓の方台部にある。とくに切り合う遺構は無いが周溝墓の南溝と接するようであり、攪乱において不明である。ここでは、土壙として取り扱うが溝状を呈している。長軸の長さは4.10m、幅は0.90m、深さは0.36mを測る。長軸の軸偏差はN－7°－Eであり、周溝墓の東溝と同一方向で並行するように構築されている。特記するような出土遺物はなく、古墳時代前期の土器破片を数点検出しただけである。

第２号土壙（第12図）

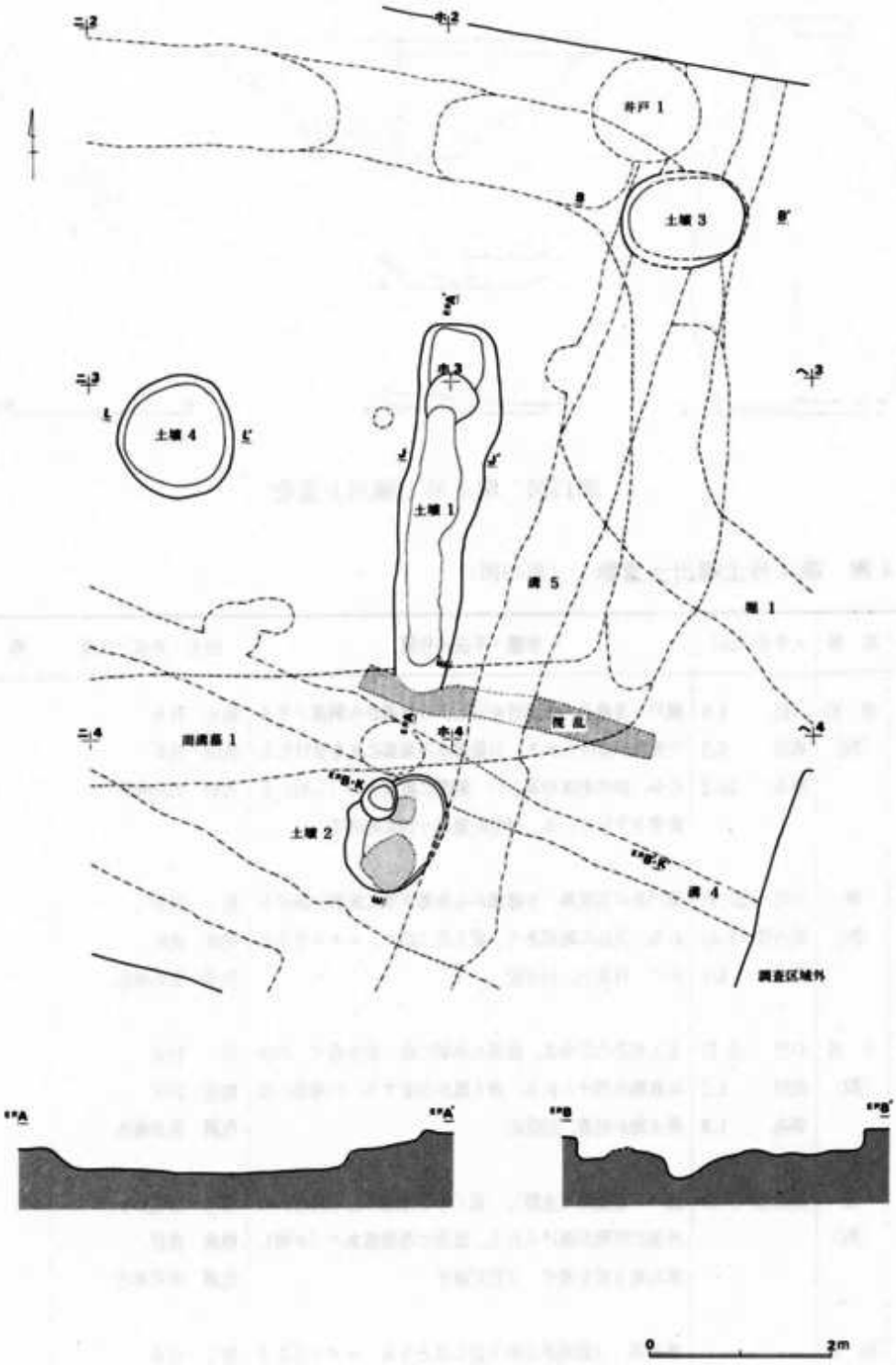
調査区の南側ニ－４グリッドに位置する。第５号溝と切り合い、本跡のほうが古い。楕円形を呈する。長軸の長さは1.40m、短軸は1.10m、深さは0.17mを測る。出土遺物は、古墳時代前期の土器破片を数点検出しただけで、図示し得るものはない。

第３号土壙（第12図）

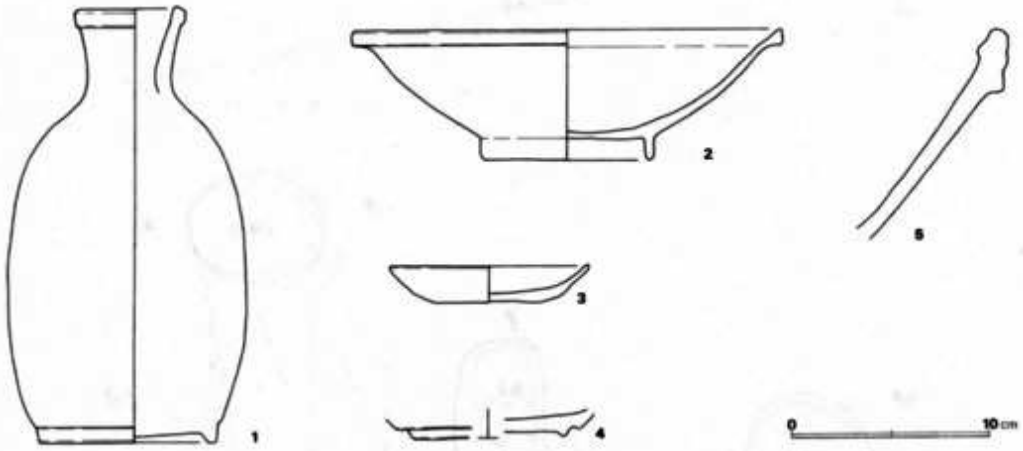
調査区の北側ホ－２グリッドに位置する。第１号方形周溝墓や第５号溝、第１号堀と切り合い原形がつかみにくいが、楕円形を呈するようである。新旧関係においては周溝墓を除いて溝・堀跡よりも本跡のほうが古くなる。確認できる規模は、長軸1.44m、短軸1.06m、推定の深さ1.02mを測る。さらに深くなるようであるが、水が湧いてきてしまい底面までは調査が及ばなかった。井戸跡とも考えられる。遺物はとくに検出できなかった。

第４号土壙（第12．13図）

調査区の中央ニ－２～３グリッドに位置する。円形を呈し、フク土は明瞭で出土遺物もそうであるが近世以降のものと判断できる。長軸の長さは1.38m、短軸は1.26m、深さは0.18mを測る浅い掘り込みである。遺物は、徳利（№１）と鉢（№２）、灯明具としての小皿（№３）が底面から出土した。



第12図　第1・2・3・4号土壙実測図



第13図　第４号土壙出土遺物

第４表　第４号土壙出土遺物　（第13図）

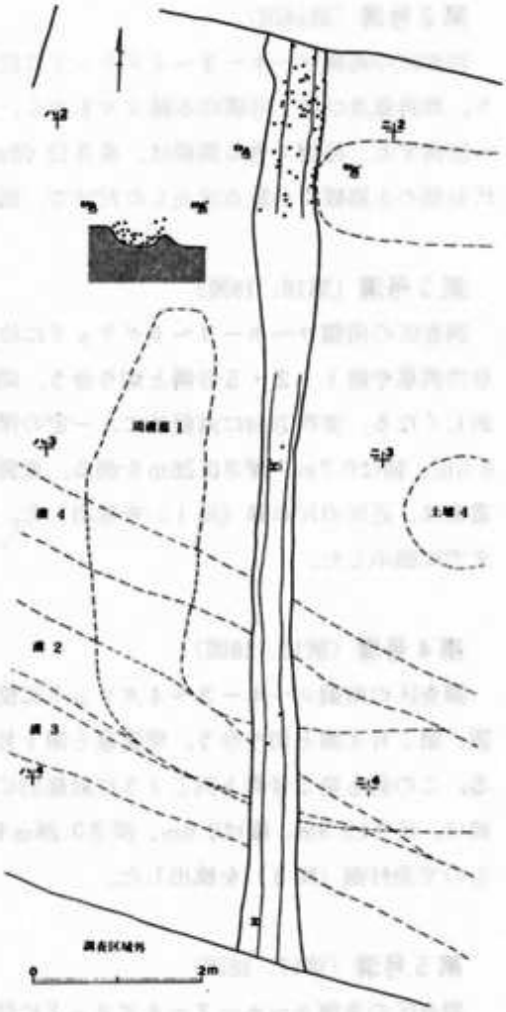
番号	器　種	大きさ（cm）	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
1	徳　利 （陶）	口径　4.0 底径　8.2 器高　22.2	瀬戸・美濃系。雨滴形を呈し、口縁部から胴部下半まで飴釉が掛けられる。口縁部から肩部に火を受けたものか、釉の剝落が著しい。胴部に縦書きで「三川」と釘書きされている。18世紀後半～19世紀前半	胎土　H多 焼成　良好 色調　淡茶褐色	
2	鉢 （陶）	口径　(21.9) 高台径 (8.4) 器高　6.7	瀬戸系の笠原鉢。口縁部から体部下半に灰釉が掛けられる。見込に釉剥あり、貫入右上がり。ロクロ目右上がり。付高台。19世紀	胎土　H多 焼成　良好 色調　淡茶褐色	
3	小　皿 （陶）	口径　(10.2) 底径　5.2 器高　1.8	志土呂系の灯明具。底部に糸切り離し痕を残す。内面に鉄釉が掛けられる。薄く煤が付着する。口唇部には炭火物が付着。19世紀	胎土　H少 焼成　良好 色調　淡茶褐色	
4	皿 （陶）	高台径 (7.6)	瀬戸・美濃系（志野）。低く小さな削り出し高台。内外面に灰釉が掛けられる。底面に墨書痕あり（不明）。重ね焼き痕を残す。17世紀後半	胎土　H(微)少 焼成　良好 色調　淡灰褐色	
5	擂　鉢 （陶）		備前系。口縁端部は折り返し状となる。ロクロ目右上がり。櫛目は９本単位となる。19世紀	胎土　H多 焼成　堅微 色調　濃茶褐色	

(3) 溝と出土遺物

第１号溝（第14. 15図）

調査区の西側ハー１～４グリッドに位置する。第１号方形周溝墓や第２・３・４号溝と切り合う。新旧関係は、周溝墓が本跡よりも古く、他は新しい時期のものである。南北方向に直線的に伸びるもので、確認できる規模は、長さ11.10m、幅は0.50m、深さ0.20mを測る。出土遺物としては、図示した壺型土器の口縁部（№１）と肩部（№２）、台付鉢（№３）と弥生時代後期の土器破片が数点出土している。

第15図　第１号溝出土遺物



第14図　第１号溝実測図

第５表　第１号溝出土遺物　（第15図）

番号	器　種	大きさ（cm）	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
1	壺	口径　(12.6)	外傾し、口唇部位に向かい短く直立する口縁部。複合口縁を呈する。外面にはLRの縄文を施し、地文を磨り消すようにナデ調整が加わる。後、棒状浮文を貼付する。内面は丁寧な磨き調整。口縁部５％残。	胎土　A微、FGH少 焼成　普通 色調　淡褐色	
2	壺		壺の胴肩部破片。外面は、横方向のヘラ磨き調整。上部のS字状結節文が見える。内面はナデ調整。器肉は薄い。外面を赤彩する。	胎土　E微、GH多 焼成　普通 色調　淡褐色	
3	台付鉢	脚径　(7.8)	低く短い脚台部。断面は三角形となる。器面調整は、内外面ともに摩耗が著しく不明瞭である。脚台部20％残。	胎土　C微、FGH少 焼成　やや不良 色調　淡褐色	

第２号溝（第16図）

調査区の南側ロ～ホ－３～４グリッドに位置する。第１号方形周溝墓や第１・３・５号溝と切り合う。周溝墓及び第１号溝は本跡よりも古く、第３・４号溝は新しくなる。西から東へ進み、東端で南へ屈曲する。確認できる規模は、長さ13.68m、幅は0.7m、深さ0.24mを測る。出土遺物は、古墳時代前期の土器破片が数点出土しただけで、図示し得るものはない。

第３号溝（第16．18図）

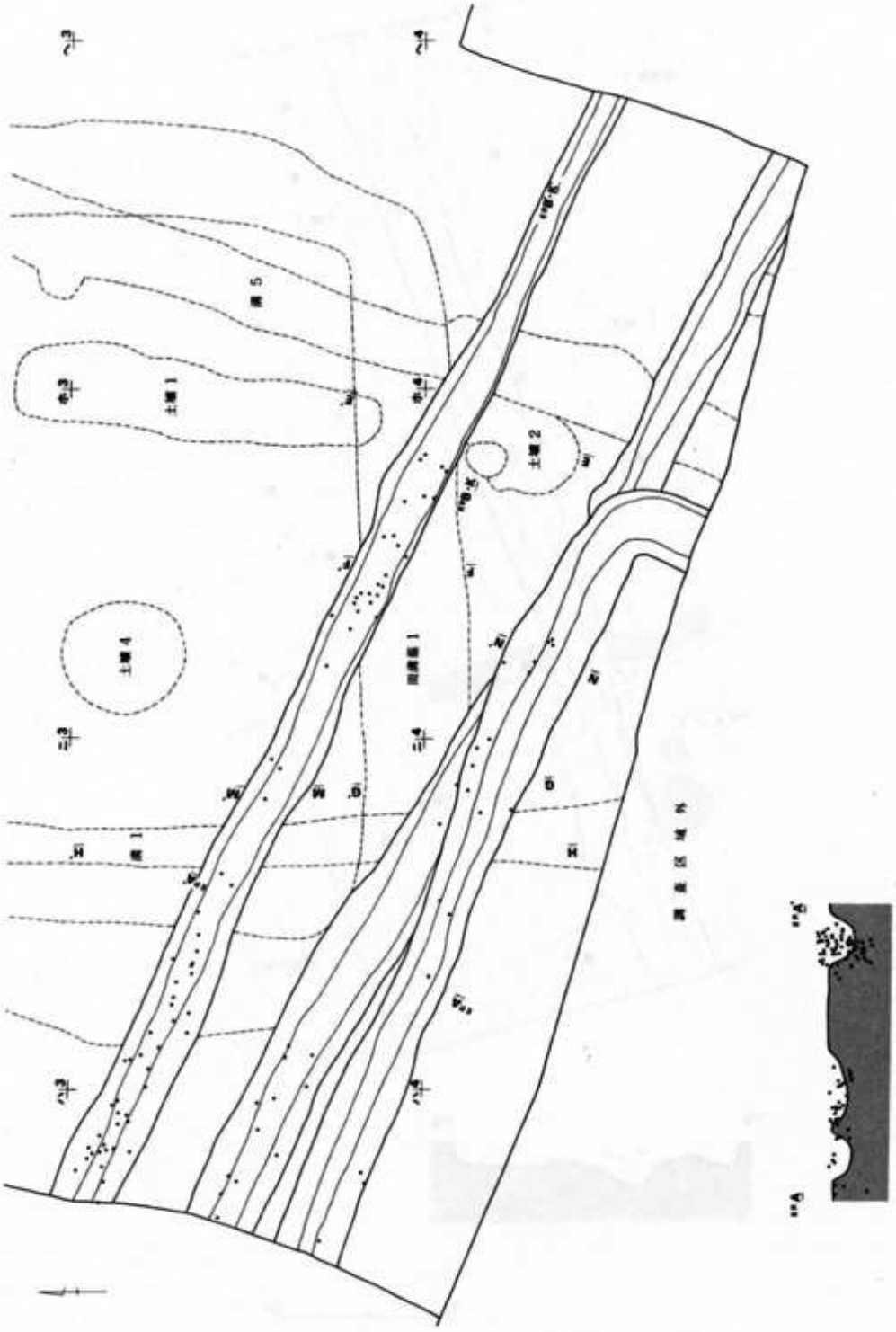
調査区の南側ロ～ホ－３～４グリッドに位置し、第２号溝と並行するように構築される。第１号方形周溝墓や第１・２・５号溝と切り合う。周溝墓と第１・２号溝は本跡よりも古く、第４・５号溝は新しくなる。東西方向に直線的に、一定の深さをもって掘り込まれている。確認できる規模は、長さ9.5m、幅は0.7m、深さ0.26mを測る。東側、西側ともそれぞれに、さらに伸びていくようである。遺物は、近世の片口鉢（№１）を検出した。なお、№２の甕の破片は中世の遺物と思われるが、参考までに図示した。

第４号溝（第16．18図）

調査区の南側ロ～ホ－３～４グリッドに位置し、斜めに横断する。第１号方形周溝墓や第１・５号溝、第２号土壙と切り合う。周溝墓と第１号溝は本跡よりも古く、第５号溝や第２号土壙は新しくなる。この溝も第２号溝と同じように直線的に、一定の深さをもって掘り込まれている。確認できる規模は、長さ13.9m、幅は0.6m、深さ0.28mを測る。東西にさらに伸びるようである。遺物は、近世のもので染付碗（№３）を検出した。

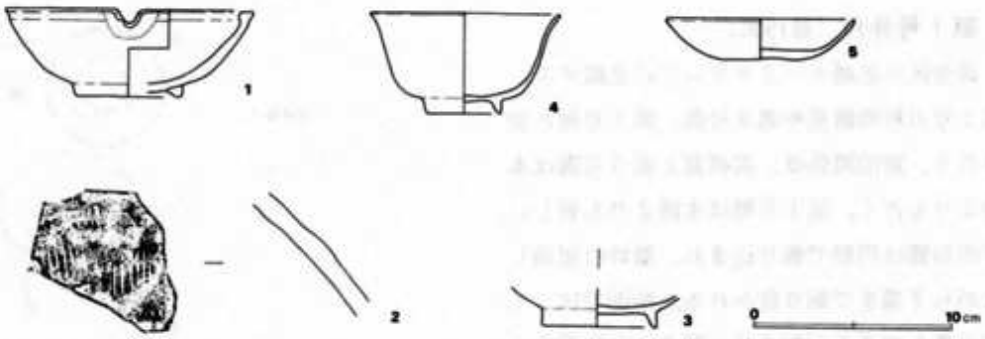
第５号溝（第17．18図）

調査区の東側ニ～ホ－２～４グリッドに位置する。第１号方形周溝墓や第２・３号土壙、第３・４号溝、第１号掘と切り合う。周溝墓や土壙、溝は本跡よりも古く、第１号掘跡は新しくなる。南側は、溝の形態を残すが、中ほどから北側は第１号掘と重なるようになり、その形態は判断することが難しくなる。いずれにしても、掘と同じ位置に重なるものと思われる。確認できる規模は、長さ11.5m、幅は0.74m、深さ0.51mを測る。出土遺物は、近世のもので肥前系の上手の染付碗（№４）と灯明具としての小皿（№５）を検出した。



第16図　第２・３・４号溝実測図

第17図　第５号溝実測図



第18図　第３・４・５号溝出土遺物

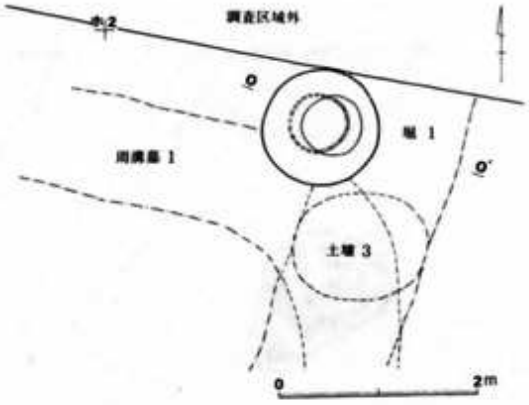
第６表　第３・４・５号溝出土遺物　（第18図）

番号	器　種	大きさ（cm）	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
1	片口鉢（陶）	口径　12.7 高台径（5.5） 器高　4.5	瀬戸・美濃系。注口は１箇所、高台を有し、断面は三角形となる。灰釉を掛ける。ロクロ目右上がり。18世紀後半～19世紀	胎土　AG微、FH少 焼成　良好 色調　淡茶褐色	第３号溝
2	甕（陶）		常滑系。甕の胴肩部片。外面には格子状の押印があり鉄釉を施す、内面には整形時の指圧痕が残る。	胎土　H少、F多 焼成　堅微 色調　濃茶褐色	第３号溝
3	碗（陶）	高台径　5.8	肥前系。染付、外面に植物文が、見込部分に草文が描かれる。18世紀	胎土　―― 焼成　良好 色調　乳白色	第４号溝
4	碗（磁）	口径　（9.6） 高台径（3.6）	肥前系。口縁部が緩やかに外反する端反碗。染付、外面に風景文が、見込部分に草文が描かれる。18世紀後半～19世紀	胎土　―― 焼成　良好 色調　乳白色	第５号溝
5	小　皿（陶）	口径　9.6 底径　3.5 器高　2.1	瀬戸系の灯明具。内面と外面の上半部に鉄釉が掛けられる。内面に重ね焼痕あり。19世紀中頃	胎土　H多 焼成　良好 色調　淡灰褐色	第５号溝

(4) 井戸と出土遺物

第１号井戸（第19図）

調査区の北側ホ－２グリッドに位置する。第１号方形周溝墓や第５号溝、第１号堀と切り合う。新旧関係は、周溝墓と第５号溝は本跡よりも古く、第１号堀は本跡よりも新しい。平面形態は円形で掘り込まれ、微妙に屈曲しながら下端まで掘り抜かれる。断面では、上部が僅かであるが漏斗状に開き、中位部から下に向かって縦位になる。上面の長さは長軸・短軸ともに1.22mで、深さは2.36mを測る。出土遺物は特にないが、底部に長さ50cmほどの木枠が検出されている。

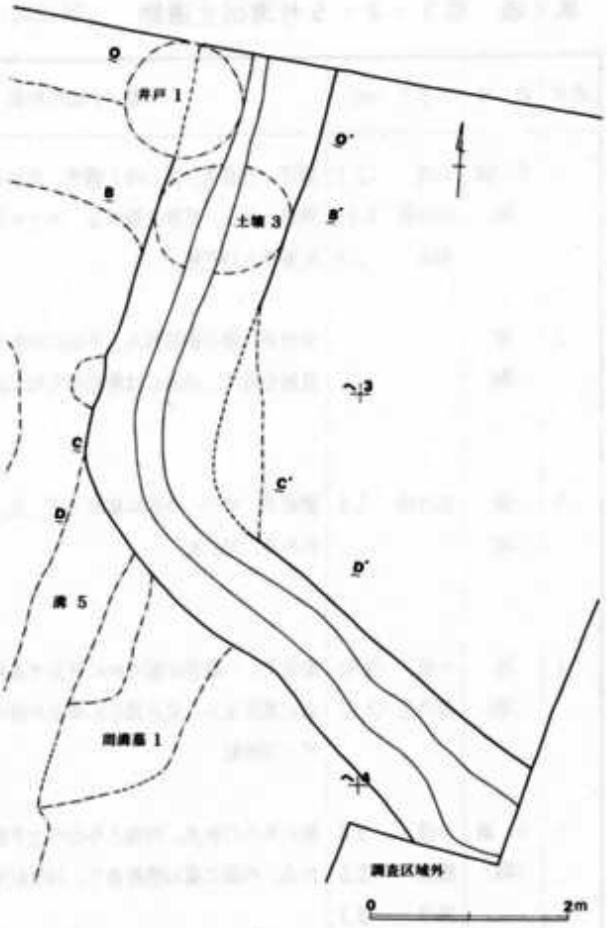


第19図　第１号井戸実測図

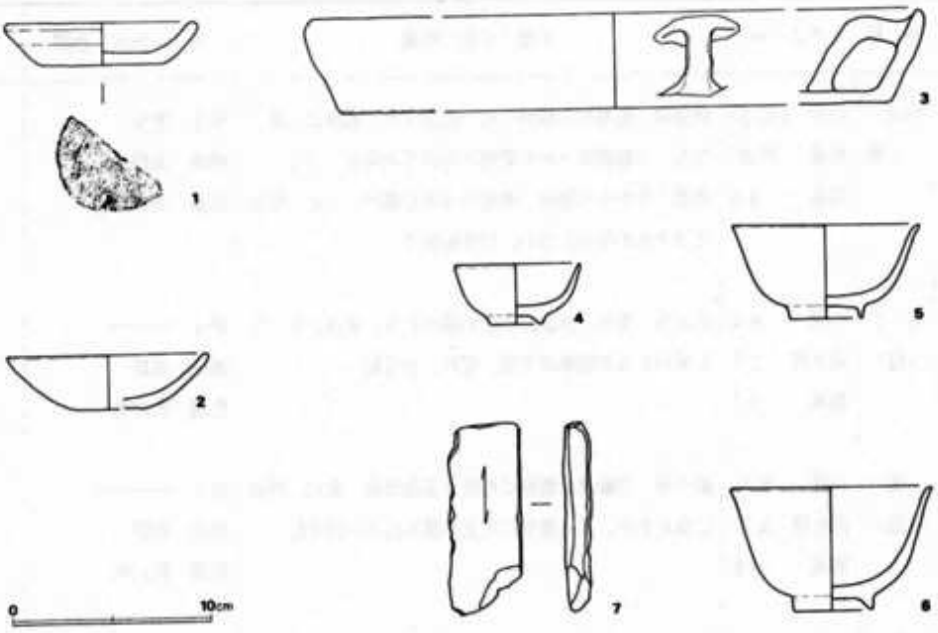
(5) 堀と出土遺物

第１号堀（第20・21図）

調査区の東側ホ～へ－２～４グリッドに位置する。第１号方形周溝墓や第３号土壙、第５号溝、第１号井戸と切り合う。新旧関係は、本跡は切り合うすべての各遺構よりも新しくなる。北から南へ進み、中ほどから南東方向へ屈曲する。断面形態は、底面からＶ字形に開きながら立ち上がる薬研堀を呈している。確認できる規模は、長さ9.42m、幅1.30m、深さ0.88mを測る。遺物は、近世以降の内耳土器（No.３）や猪口（No.４）、碗（No.５．６）など陶磁器の破片を多数検出している。



第20図　第１号堀実測図



第21図　第１号堀出土遺物

第７表　第１号堀出土遺物(1)　（第21図）

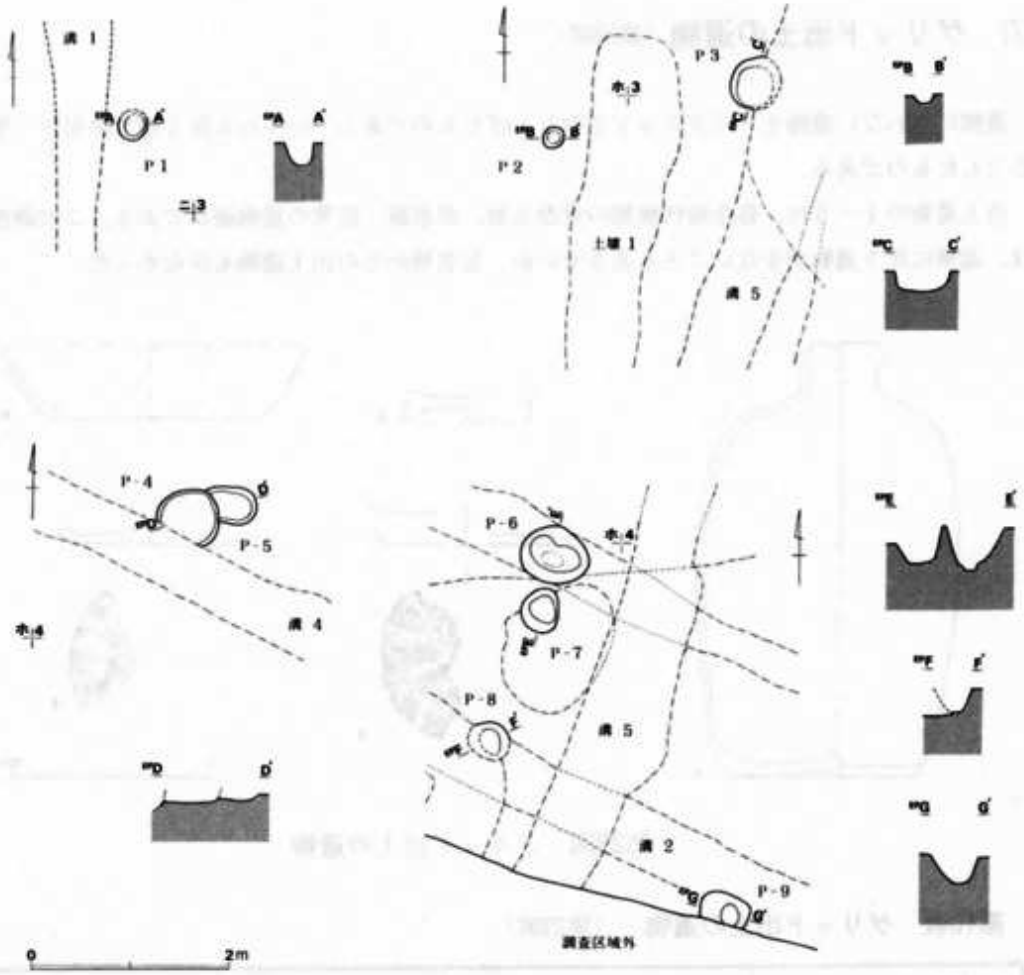
番号	器　種	大きさ（cm）	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
1	小　皿	口径　(9.8) 底径　(6.3) 器高　(2.2)	灯明具、底面に糸切り離し痕を残す。ロクロ右回り。内面の中位まで煤が付着する。17世紀以前	胎土　DF少、H多 焼成　良好 色調　淡橙褐色	
2	小　皿 （磁）	口径　(10.2) 底径　(3.5) 器高　2.8	肥前系。底部は削り出し上げ底状となる。内面に３筋の平行線が施される。外面下部は無釉となる。内面にハリ支え痕あり。外面に少量の漆が付着する。19世紀	胎土　―― 焼成　良好 色調　乳白色	

第８表　第１号堀出土遺物(2)

番号	器　種	大きさ（cm）	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
3	内耳土器	口径　(10.2) 底径　(27.8) 器高　9.6	体部は、底部から傾斜し短く直立する。底部は平底となる。口縁部直下から底部にかけて内耳をつける。体部下半から口唇部の外面のみ黒く煤けている。底面にはそれが見られない。17世紀前半	胎土　H少 焼成　良好 色調　淡橙褐色	
4	猪口（磁）	口径　6.4 高台径　2.7 器高　3.1	肥前系。染付、外面に草文が描かれる。見込においても描かれるが絵柄は不明。完存。19世紀	胎土　——— 焼成　良好 色調　乳白色	
5	碗（磁）	口径　(9.5) 高台径 (3.7) 器高　4.8	瀬戸系。口縁部が微妙に外反する端反碗。染付、外面に草花文が、見込部分に花文が描かれる。19世紀	胎土　——— 焼成　良好 色調　乳白色	
6	碗（磁）	口径　(10.2) 高台径 (4.0) 器高　6.4	肥前系。口縁部が外反する端反碗。染付、外面に草花文が、見込部分に花文が描かれる。18世紀後半	胎土　——— 焼成　良好 色調　乳白色	
7	砥　石	長さ　(9.7) 幅　(3.7) 厚さ　1.3	表面のみを砥ぎ面とする。表面は緩やかに凸凹はあるが平滑になっている。	石質　凝灰石	

(6)　その他の遺構と出土遺物（第22図）

調査区内から、ピットが各遺構の間に散在するように９ヶ所検出されている。各ピットの形態や規模については、第20図に記したとおりである。それぞれが関連性をもって構築されているとは言い難く、各ピットにおける掘立柱建物跡等の関連性は認められないようである。なお、ピットに伴う遺物は検出されていない。



第22図　ピット実測図

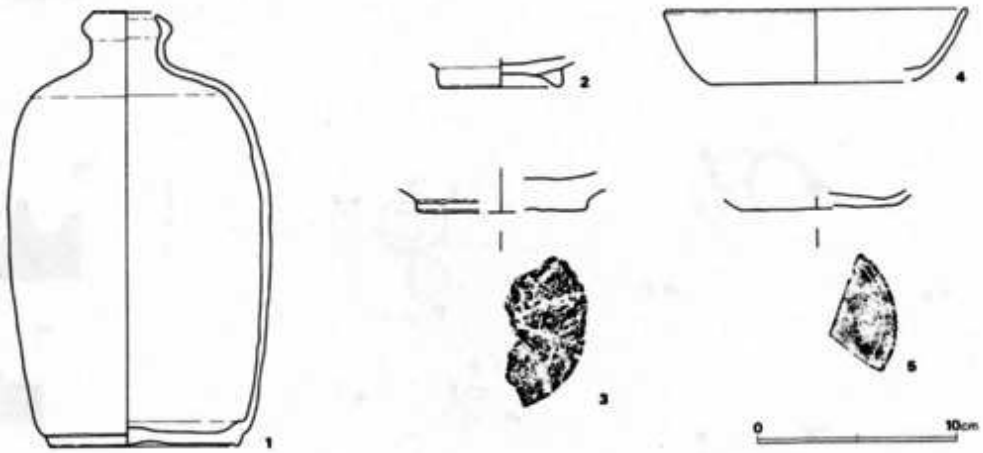
第9表　ピット一覧表（第22図）

番　号	グリッド	形　　態	長　軸	短　軸	深　さ	底面形	備　考
1	ハ－2	円　　形	28	(28)	21		
2	ニ－3	円　　形	22	22	9		
3	ホ－2	円　　形	56	56	23		
4	ニ－3	円　　形	(60)	60	9		
5	ニ－3	楕 円 形	60	36	6		
6	ニ－4	楕 円 形	70	58	46		
7	ニ－4	不整楕円形	45	35	39		
8	ニ－4	楕 円 形	(44)	(38)	24		
9	ホ－4	不 整 円 形	50	(38)	32		

(7) グリッド出土の遺物（第23図）

遺構に伴わない遺物としてグリッドで取り上げたものである。いずれも第4層の暗褐色土層中から出土したものである。

出土遺物の1～5は、弥生時代後期の壺型土器、須恵器、近世の遺物破片である。この調査区からは、遺構に伴う遺物が少ないこともあるせいか、包含層からの出土遺物も少なかった。



第23図　グリッド出土の遺物

第10表　グリッド出土の遺物　（第23図）

番号	器　種	大きさ（cm）	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
1	徳　利（陶）	口径　3.2 底径　9.6 器高　22.3	瀬戸・美濃系。寸胴型を呈し、灰釉を掛ける。底部及び肩部上面にハリ支え痕あり。釘書き痕あるが、解読不明。ロクロ目右上がり。18～19世紀	胎土　FH（細）多 焼成　良好（堅微） 色調　淡灰褐色	
2	台付鉢	高台径（6.1）	台付鉢の底部。高台を付す。断面は三角形となる。10世紀。	胎土　FGH少 焼成　良好 色調　淡灰褐色	
3	壺	底径　（8.4）	弥生土器の底部破片。底面に三筋の線刻を施す。内面に赤彩痕。	胎土　FGH多 焼成　良好 色調　淡橙褐色	
4	杯	口径　（15.3） 底径　（9.8） 器高　3.7	須恵器の杯破片。内面にロクロ整形痕が見られる。底部は若干厚みをもつ。8世紀後半	胎土　FH多 焼成　良好 色調　淡灰褐色	
5	杯	底径　（7.8）	須恵器の底部破片。底面は糸切り離し後、外側部分のみ削り整形が施される。8世紀中頃	胎土　FH（細）多 針状粒子多 焼成　良好 色調　淡灰褐色	

6 まとめ

鍛冶谷・新田口遺跡の発掘調査は、今回で6次を数える。今回の調査結果をまとめると、弥生時代後期の方形周溝墓1基、溝1本、土壙1基、18～19世紀頃に比定される江戸後期（註1）の土壙1基、堀跡1本を検出した。その他、遺物の検出が少なく時期の推定ができないものである。ここでは、本遺跡の主体を占める方形周溝墓についてまとめておきたい（註2）。

検出された方形周溝墓は、溝や堀が後世に掘られており、コーナー部分の明確な検出ができず残念であるが、全体の形が辛うじて確認できた。これで、同遺跡内から検出された方形周溝墓は、104基を数えるものとなった。形態は長方形で、推定面積は86.1㎡を測る。当集落内では、分類上Cタイプに属し（註3）、規模は中型B類に位置付けられるものである（註4）。開口部は1ヶ所で、西溝と北溝のコーナー部分に位置するタイプである。また、当遺跡内の方形周溝墓の特徴として壙中埋葬施設の存在を窺わせる土壙状の堀り込みであるが、本跡のそれも同じ様で東・西・北溝の3辺から検出した。さらに、西溝については一段深くなった部分の底面から土器が出土しており、溝中の土壙が構築された段階での土器として考えられ、炭化物等の検出はないものの埋葬施設を想像させるものである。検出された土器が少なく時期の設定は難しいが、『鍛冶谷・新田口遺跡』で報告されている分類からすると、第2期の前野町式期のものと推定する（註5）。以上、方形周溝墓についてまとめとする。

今回の調査地点は、周辺地域での遺跡範囲確認調査の経過から同集落の南端部分に相当するものと推定できる。そして、（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団の調査において確認されている北端部分から測ると南北約120mに達する広範囲なものとなるようである。自然堤防という限定された地域で河川の氾濫など水の影響を受けやすいところに位置する。このような地域にあって幾重にも折り重なるように構築された方形周溝墓群を想像すると、古代社会に対する自然の厳しさの一面を感じとることができた。

〔註〕

註1　野沢均氏より御教示。

註2　ここでは、（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団により報告されている「鍛冶谷・新田口遺跡」において方形周溝墓の分類がされているので、その中に位置付けをしておきたい。
　西口正純「鍛冶谷・新田口遺跡」　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第62集
（財）埋蔵文化財調査事業団　1986

註3　形態について、A～Hタイプの8種類に分類されている。本跡は、Cタイプで「コーナー1ヶ所にブリッジを持つもの」として分類されている。

註4　規模について特大型（395㎡以上）、大型（234～243㎡）、中型A（131～196㎡）、中型B（72～122㎡）、小型（53㎡以下）に区分されている。

註5　註2の文献に同じ。

〔参考文献〕

「戸田市史　資料編Ⅰ」　戸田市　1981

塩野博・伊藤和彦「鍛冶谷・新田口遺跡」戸田市文化財調査報告Ⅱ　戸田市教育委員会　1969

小島清一「鍛冶谷・新田口遺跡Ⅴ」戸田市遺跡調査会報告書第２集　戸田市遺跡調査会　1990

(1) 鍛冶谷・新田口遺跡Ⅵの位置

(2) 調査区域全景及び第 1 号方形周溝墓

図版 2

(1) 第 1 号方形周溝墓西溝（南から）

(2) 第 1 号方形周溝墓南溝（西から）

(3) 第 1 号方形周溝墓東溝（北から）

(1) 第1号方形周溝墓北溝（西から）

(2) 第1号方形周溝墓東溝と
第1号堀の切り合い状態

(3) 第1号方形周溝墓西溝土器出土状態(第11図-10)

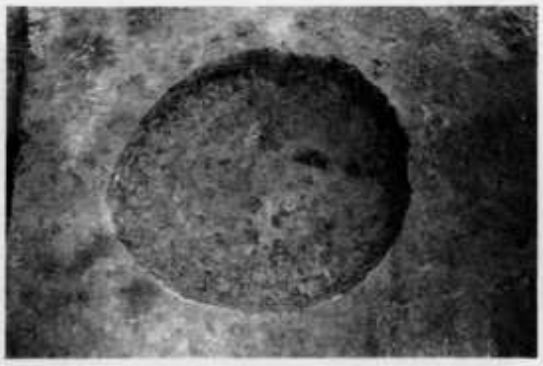
(4) 第1号方形周溝墓東溝

(5) 第1号土壙（北から）

図版 4

(1) 第 2 号土壙

(2) 第 3 号土壙



(3) 第 4 号土壙

(4) 第 4 号土壙遺物出土状態（第13図－1・2）

(5) 第 1 号溝（南から）

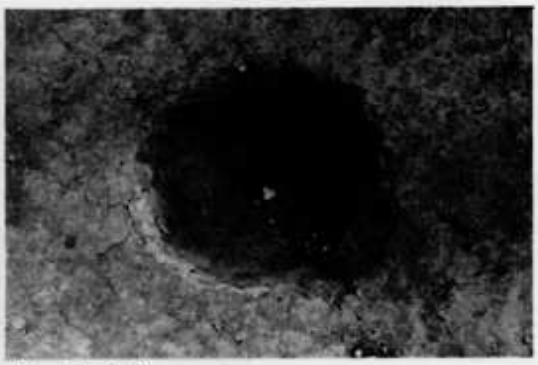
(6) 第 2・3・4 号溝（東から）

(1) 第 5 号溝（南から）

(2) 第 1 号堀

図版 6

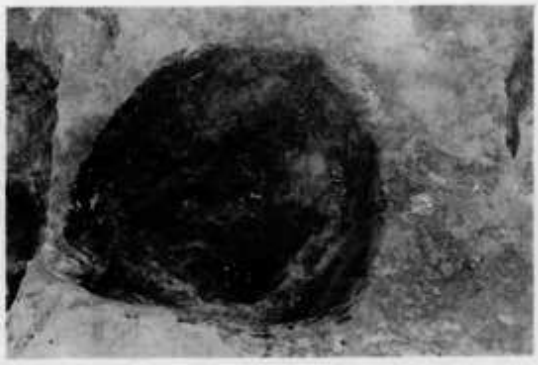
(1) ピット 1



(2) ピット 2

(3) ピット 3

(4) ピット 4



(5) ピット 5

(6) ピット 6

(7) ピット 7

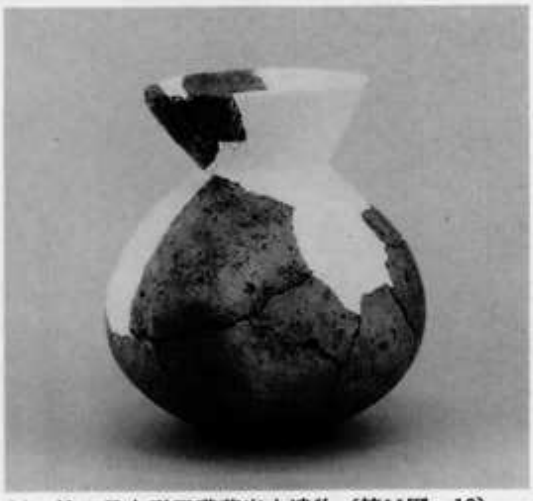
(8) 第 1 号井戸

(1) 第 1 号方形周溝墓出土遺物（第11図－1）

(2) 底部穿孔（第11図－1）

(3) 第 1 号方形周溝墓出土遺物（第11図－2）

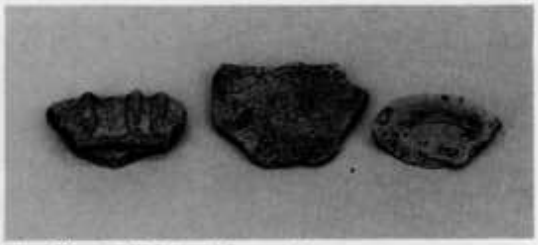
(4) 第 1 号方形周溝墓出土遺物（第11図－3）



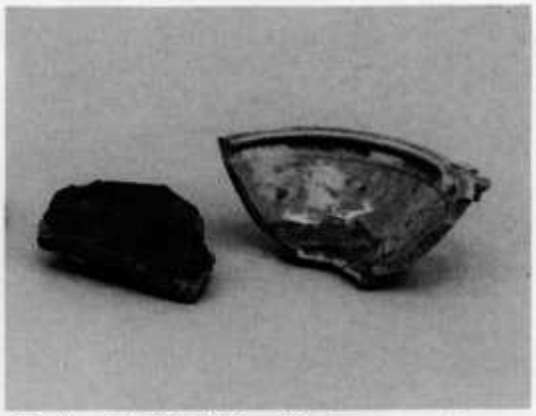
(5) 第 1 号方形周溝墓出土遺物（第11図－10）

(6) 第 4 号土壙出土遺物（第13図－1～5）

図版 8

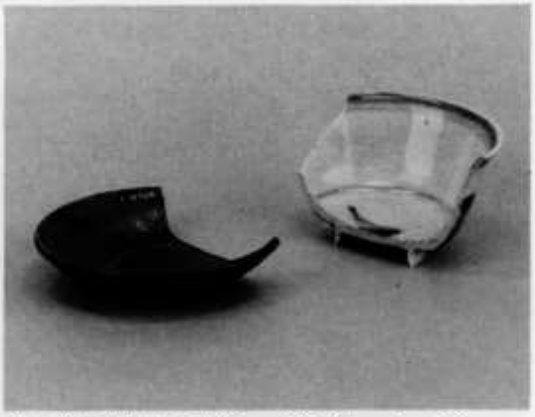


(1) 第 1 号溝出土遺物　（第15図－1～3）



(2) 第 3 号溝出土遺物　（第18図－1・2）

(3) 第 4 号溝出土遺物　（第18図－3）



(4) 第 5 号溝出土遺物　（第18図－4・5）

(5) 第 1 号堀出土遺物　（第21図－1～6）

(6) グリッド出土の遺物（第23図－1）

鍛冶谷・新田口遺跡Ⅵ

埼玉県戸田市遺跡調査会報告書　第４集

発行日　平成６年６月２７日

発　行　戸田市遺跡調査会
戸田市上戸田１－18－１
戸田市教育委員会内

印　刷　カ　ミ　ヤ　印　刷
浦和市道場３－14－４